



民事訴訟法

1274



114
A2701



民事訴訟法目錄

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ物上ノ管轄

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄

第三節 管轄裁判所ノ指定

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テ

ノ合意

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ

忌避

第六節 検事ノ立會

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

至自 第第 四四 十十 八四 條條	至自 第第 四四 十十 三四 條條	至自 第第 四四 十十 三二 條條	至自 第第 四三 十十 一二 條條	至自 第第 三二 十十 一九 條條	至自 第第 二二 十十 八六 條條	至自 第第 二二 十十 五五 條條	至自 第第 四一 十一 三三 條條	至自 第第 百一 九一 十十 條條
----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------

大正
十一年
四月
贈

第二節	共同訴訟人	至第	自第	五十四	五十九	條
第三節	第三者ノ訴訟參加	至第	自第	六十五	七十二	條
第四節	訴訟代理人及ヒ輔佐人	至第	自第	七十六	八十二	條
第五節	訴訟費用	至第	自第	七十七	八十三	條
第六節	保證	至第	自第	七十八	八十四	條
第七節	訴訟上ノ救助	至第	自第	七十九	八十五	條
第三章	訴訟手續	至第	自第	九十四	一百零二	條
第一節	口頭辯論及ヒ準備書面	至第	自第	九十九	一百零四	條
第二節	送達	至第	自第	一百零五	一百一十	條
第三節	期日及ヒ期間	至第	自第	一百零七	一百一十二	條
第四節	懈怠ノ結果及ヒ原狀	至第	自第	一百一十三	一百一十八	條

第五節	訴訟手續ノ中斷及ヒ中止	至第	自第	一百一十九	一百二十四	條
第二編	第一審ノ訴訟手續	至第	自第	一百二十五	一百三十一	條
第一章	地方裁判所ノ訴訟手續	至第	自第	一百三十二	一百三十八	條
第一節	判決前ノ訴訟手續	至第	自第	一百三十九	一百四十五	條
第二節	判決	至第	自第	一百四十六	一百五十二	條
第三節	闕席判決	至第	自第	一百五十三	一百五十九	條
第四節	計算事件、財産分別及ヒ此	至第	自第	一百六十	一百六十六	條
第五節	ニ類スル訴訟ノ準備手續	至第	自第	一百六十七	一百七十三	條
第六節	證據調ノ總則	至第	自第	一百七十四	一百八十	條
第七節	人證	至第	自第	一百八十一	一百八十七	條
第八節	鑑定	至第	自第	一百八十八	一百九十四	條
第九節	書證	至第	自第	一百九十五	二百零一	條

第九節	檢證	自第三百五十八條
第十節	當事者本人ノ訊問	自第三百六十一條
第十一節	證據保全	自第三百六十五條
第二章	區裁判所ノ訴訟手續	自第三百七十四條
第一節	通常ノ訴訟手續	自第三百七十七條
第二節	督促手續	自第三百八十二條
第三編	上訴	自第三百九十三條
第一章	控訴	自第三百九十八條
第二章	上告	自第四百零五條
第三章	抗告	自第四百一十三條
第四編	再審	自第四百一十五條
第五編	證書訴訟及ヒ爲替訴訟	自第四百一十六條
第六編	強制執行	自第四百一十七條

第一章	總則	自第五百七十三條
第二章	金錢ノ債權ニ付テノ強制執行	自第五百七十七條
第一節	動産ニ對スル強制執行	自第五百七十四條
第一款	通則	自第五百七十四條
第二款	有體動産ニ對スル強制執行	自第五百七十五條
執行		自第五百七十六條
第三款	債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行	自第五百七十六條
對スル強制執行		自第五百七十六條
第四款	配當手續	自第五百七十九條
第二節	不動産ニ對スル強制執行	自第五百八十八條
第一款	通則	自第五百九十三條
第二款	強制競賣	自第六百一十七條

第三款 強制管理

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル

債權ニ付テノ強制執行

第四章 假差押及ヒ假處分

第七編 公示催告手續

第八編 仲裁手續

自第七百二十八條
至第七百四十九條

自第七百四十二條
至第七百七十九條
自第七百七十五條
至第七百九十七條
自第八百十七條

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ物上ノ管轄

第一條 裁判所ノ物上ノ管轄ハ帝國裁判所構成法ノ規定ニ從

フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルルハ以下數條ノ規

定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ

算定ス

果實、收入、利息、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主
タル請求ヲ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルルハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲スルハ前條第二項ニ揭

クルモノヲ除クノ外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キキハ其減額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルキハ爭アル時期ニ當ル賃貸ノ額ニ依ル但一个年賃貸ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キキハ其二十倍ノ額

ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收入ニ付テノ權利カ訴訟物ナルキ

ハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第

五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ハ其事件區裁判所ノ物上ノ管轄ニ

屬ス可キノ理由ヲ以テ之ニ對シ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第八條 物上ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト言渡シ其言渡確定シタルキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ

繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ物上ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スル
キハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル
自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ
區裁判所カ物上ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルキハ同時
ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ
移送ノ申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス
可シ

移送言渡ノ判決確定シタルキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁
判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テ
ノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場

合ニ限ル

人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依テ定マル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫
所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ
兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セ
ス

第十二條 外國ニ在テ治外法權ヲ有スル帝國官吏其家族及ヒ
從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住
所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ
豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現
在地ニ依テ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在
ルキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依テ定マル

然レモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依テ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、ヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依テ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキ又ハ數所ニ於テ事務所ヲ取扱フキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ其所有者、用益者又ハ賃借人トシテ利用スル者ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ

銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノアリタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ權原並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラ

ニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス
第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スヲ得
不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因テ効果ヲ生スル處分ニ基ク請求又ハ相續分割ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スヲ得
相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判

所ノ管轄區内ニ存在スルキ又ハ相續人數人アリテ未タ遺產ヲ分タサルキニ限ル

第二十五條 原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲ス可ク得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ帝國裁判所構成法ニ定メタル場合ヲ除クノ外不動産上ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起ス可ク且不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルキ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ帝國裁判所構成法第十三條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲ス可ク

得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲スキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルキ
第二 物上又ハ土地ノ專屬管轄ニ屬スル訴ナルキ

第五節 裁判所職員ノ除外及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除外セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルキ
第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルキ又ハ訴訟代理人タルノ任ヲ受クルキ

若クハ受ケタルキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルキ若クハ之ヲ有シタルキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ參與シタルキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除外セラル、
一 無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラル、
キ及ヒ偏頗ノ恐アルキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルヲ得
偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スヲ疑フニ足ル可キ情况アルキ之ヲ爲スヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラル、
場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ

問ハス之ヲ爲スヲ得又偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲スルハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルヲ疏明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルハ其

裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ依リ決定ヲ爲スヲ能ハサルハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事忌避ノ申請ヲ正當ナリトスルハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ
總テノ行爲ヲ避ク可シ然レモ偏頗ノ爲メ忌避セラレタル判
事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ
原因タル情況ニ付キ判事ヨリ申出アルキ又ハ他ノ事由ヨリシ
テ判事カ法律ニ依リ除外セラル、ノ疑アルキモ亦裁判ヲ爲ス
此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之
ヲ當事者ニ送達スルヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ適用ス但其裁
判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 裁判所ハ左ノ訴訟ニ付テハ口頭辯論ノ期日前ニ
檢事ニ通知ヲ爲シ檢事ハ其口頭辯論ニ立會フヲ要ス

第一 國其他公ノ無形人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關ス
ル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタル片之ヲ爲ス
當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲
スヲ得

第四十三條 前條ニ掲ケタル訴訟ノ外ト雖モ檢事ハ立會フヲ
ヲ必要トスルキハ其訴訟ノ口頭辯論ニ立會フヲ求メ又裁
判所ハ職權ヲ以テ檢事ノ立會ヲ求ムルヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十四條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理
人ヲシテ之ヲ爲サシムルノ能力ト法律上代理人ニ依レル訴
訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴
訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從
フ

第四十五條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサル
モ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルキハ之ヲ有
スルモノト看做ス

第四十六條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職
權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タルノ資格及ヒ訴訟ヲ爲ス
ニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヲ調査ス可シ
裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ
補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルキハ原告若クハ被告又ハ其法
律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲スノ條件ヲ以テ一時訴訟ヲ
爲スヲ許スヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相
當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スヲ得ス但其
欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完
スルヲ得

第四十七條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分
明ナル相續人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人
アラサルキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ

因リ遲滯ノ爲メ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ
右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルキハ其任セラレタル代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ
申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スヲ得
裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス
第四十八條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルキハ遲滯ノ

爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルヲ得
其他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除クノ外總テ前條ノ規定ヲ適用ス
第二節 共同訴訟人
第四十九條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルヲ得
第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツキ
第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルキ
第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルキ
十一

第五十條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十一條 然レモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法證據方法ヲ包含スハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ効ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルモト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於

テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十二條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲メニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ伸張スルヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルヲ主張スルキ亦同シ

第五十三條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス原告被告若クハ參加原告ノ申立ニ因リ又ハ職權

ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第五十四條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一

方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何

ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ

補助スル爲メ之ニ附隨スルヲ得

第五十五條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ

妨ケサル限りハ其主タル原告若クハ被告ノ爲メニ攻撃及ヒ

防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主

タル原告若クハ被告ノ爲メニ存スル期間内ニ故障、支拂命令

ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲スノ權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及

ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ

陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準トス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定

アルキハ此限ニ在ラス

第五十六條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルキト雖モ其補助

シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判

ヲ不當ナリト主張スルヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告

若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルヲ

妨ケラル、キ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當

時知ラサリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ

施用セサリシキニ限り其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルヲ得

第五十七條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係(第五十三條)及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ
從參加ハ故障異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スヲ得

第五十八條 原告若クハ被告從參加ニ付キ異議ヲ述フルキハ當事者及ヒ參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得
利害關係ノ存否ニ付キ爭アルキハ參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

參加ヲ許サル裁判確定セサル間ハ參加人ヲ本訴訟ニ參加セシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルキハ參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十九條 參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ之ヲ脱退セシム可シ

第六十條 原告若クハ被告其敗訴ノ場合ニ於テ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信スルキ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キヲ恐ル、キハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルヲ得
訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルヲ得

第六十一條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

其書面ハ第三者ニ送達スルヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其謄本ヲ送付ス可シ

第六十二條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラス之ヲ續行ス

第六十三條 第三者ノ名ヲ以テ物品ヲ占有スルヲ主張スル者其物品ノ占有者トシテ被告ト爲リタルキハ本案ノ辯論前
第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムル
キハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フキ又ハ陳述ヲ爲サ、ルキハ被告

ハ原告ノ申立ニ應スルヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルヲ得原告ノ承諾ハ被告カ第三者ノ名ヲ以テ占有スルニ關セサル請求ニ限り之ヲ必要トス
第三者カ訴訟ヲ引受ケタルキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ之ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ其物品ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ効力ヲ有シ且之ヲ執行スルヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十四條 原告若クハ被告ハ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス
辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコヲ得

第六十五條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十六條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲スノ權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スルノ權ヲ有セス

第六十七條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十六條第一項)ヲ制限スルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

然レモ辯護士ニ依レル代理ヲ除クノ外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコヲ得

第六十八條 訴訟代理人數人アルキハ共同若クハ各別ニテ原告若クハ被告ヲ代理スルコヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

第六十九條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルキニ限り其効力ヲ失フ

第七十條 委任者ノ死亡其訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ其通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲サル間ハ其委任者ノ爲メニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十一條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式

ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ情況ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スコト許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

七十二條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人トシ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人トシテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルキニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做

ス

第五節 訴訟費用

第七十三條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十四條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルヲ得ス然レモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段

ノ費用ヲ生セサリシキ又ハ判事ノ意見鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルヲ得サリシキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルヲ得

第七十五條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

第七十六條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲メニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滞ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス此カ爲メニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十七條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法

ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルヲ得

第七十八條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十九條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルヲ得

第八十條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲スキハ其訴訟ノ費用ハ和解ノ費用ト共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別

段ノ合意ヲ爲シタルキハ此限ニ在ラス

第八十一條 民法ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲メニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十二條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十三條乃至第七十九條ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

參加ヲ許シタルキ又ハ異議ヲ述ヘサルキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル主タル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第八十三條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス其他ノ裁判ニ對シテハ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十四條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシ

ムルノ決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前當事者ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲スノ機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十五條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十三條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除クノ外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十六條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スル
ヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與
シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告
スルヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第八十七條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ
分擔ス可キハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方
ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨
ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ
相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ
費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲スノ妨ト爲ルヲ無シ

第六節 保證

第八十八條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合

又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルヲ裁判所ノ自由ナル意見
ニ任スル場合ヲ除クノ外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナ
リトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十九條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對
シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツルノ義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人
カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツルノ義務ナキハ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ數額及ヒ期間ヲ確定ス可
シ

其數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ
訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キヲ被告カ求ムルキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルキハ此限ニ在ラス

第九十一條 確定ノ期間後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十二條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出ダスヲ能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ請求スルヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防

禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルキニ限ル

第九十三條 外國人ハ其屬スル國ノ法律又ハ國際條約ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ請求スルヲ得ルキニ限り之ヲ請求スルヲ得

第九十四條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出ダスヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ヲ併セテ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルキハ上級審ニ於テハ無
資力ヲ證スルヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルキハ上級
審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ
伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤ
ヲ調査スルヲ要セス

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ一カ存セサ
リシキ又ハ消滅シタルキハ何時タリモ之ヲ取消スルヲ得

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ
死亡ト共ニ消滅ス

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ
爲メニ左ノ効力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルヲ假
免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルヲ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニ
テ執達吏ノ附添ヲ求ムルノ權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタ
ル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬
ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルヲ得

第九十九條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟ス
ル義務ニ影響ヲ及ホサス

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免
除シタル裁判費用ハ未納裁判費用ノ取立ニ關スル規定ニ準
シ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ
上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可
キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルヲ得

第一百一條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルキハ假免除ヲ得タル數額(第九十八條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスルノ義務アリトス

第一百二條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與并ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得

第一百三條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限り抗告ヲ

爲スヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百四條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ定メタルキハ此限ニ在ラス

第一百五條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百六條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁

判所、訴訟物及ヒ附屬書類

- 第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
- 第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係
- 第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述
- 第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

- 第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印
- 第七 場所、年、月、日

第七條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ記載ス可シ
其他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルヲ得ス

第八條 準備書面ニハ訴訟資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノ、謄本ヲ添附ス可シ
證書ノ一部分ノミヲ要用トスルキハ其冒頭事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル
證書カ既ニ相手方ニ知レタルキ又ハ大部ナルキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル
第九條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ
若シ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ差出サ、ルキハ

裁判所書記ハ其懈怠者ノ費用ヲ以テ之ヲ作ラシム可シ
第一百十條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルヲ
得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯
論ノ終了スルヲ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯
論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルキ
ハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言
渡ス

第一百十一條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因テ始マル
當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ
包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルヲ許サス文字上ノ旨趣
ヲ要用トスル書類又ハ其一部分ニ限り之ヲ朗讀スルヲ得

第一百十二條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述
ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ
爭ハントスルノ意思カ顯レサルキハ自白シタルモノト看做
ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ
實驗シタモノニモ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ
不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第一百十三條 裁判長ハ職權上調査ス可キノ點ニ關シ相手方ヨ
リ起サ、ル疑ノ存スルキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スヲ得
裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事

實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ
關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ
陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルヲ得
當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルヲ得然レモ其間
ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルヲ得
若シ其間ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルキハ相手方ノ利
益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スヲ得
第百十四條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若ク
ハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ參カル者ヨリ不適法
ナリトシテ異議ヲ述ヘタルキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直ク
ニ裁判ヲ爲ス
第百十五條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告
若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルヲ得

第百十六條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシ
テ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルヲ得
裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附
ス可キヲ命スルヲ得
第百十七條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件
ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルヲ得
第百十八條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルヲ得
其手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從
フ
第百十九條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又
ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スル
ヲ得
第百二十條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦

ノ方法ヲ提出シタルルキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限
ス可キヲ命スルヲ得

第二百一十一條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟
ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノヲ併合ス可キヲ命スルヲ得
得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ
得ヘキニ限ル

第二百一十二條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫
屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ
繫ルルキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可キヲ命
スルヲ得

第二百一十三條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生ス
ルキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但
其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホスキニ限ル

第二百一十四條 裁判所ハ前條ノ場合ヲ除クノ外分離併合又ハ
中止ニ關シ發シタル命ヲ取消スヲ得

第二百一十五條 裁判所ハ閉ナタル辯論ノ再開ヲ命スルヲ得
第二百一十六條 裁判所ハ辯論ニ參カル者日本語ニ通セサルルキ
ハ通事ヲ立會ハシム但帝國裁判所構成法第二百一十五條ノ場
合ハ此限ニ在ラス

第二百一十七條 裁判所ハ辯論ニ參カル者聾又ハ啞ナルルキ之ニ
文字ヲ以テ理會セシムルヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會
ハシムルヲ得

第二百一十八條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原
告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ
禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キヲ命ス
可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ
本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第二百二十九條 辯論ニ參カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フヲ得但帝國裁判所構成法第二百十七條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フヲ得

第三百十條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 辯論ノ場所、年、月、日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告闕席シタルキハ其闕席シタルヲ

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルヲ

第三百三十一條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモ
ノナルキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命

令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書
類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第三百二十二條 前條第二項第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書
ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ
之ヲ關係人ニ示ス
調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルヲ及ヒ承諾ヲ爲シタルヲ又

ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百二十三條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可
シ

裁判長差支アルキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺
印ス區裁判所判事差支アルキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ
以テ足ル

第三百二十四條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ
法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム
前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第三百二十五條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書
ヲ以テノミ之ヲ證スルヲ得

第三百三十六條 總テ口頭ヲ以テ申立ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判
所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第三百三十七條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム
裁判所書記ハ其所屬裁判所ノ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ
又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達
ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キヲ囑託ス
裁判所書記ハ郵便ニ依テモ亦送達ヲ爲サシムルヲ得
第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便
配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス
第三百三十八條 送達ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ又送達ス可
キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルキ
ハ其正本又ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス
當事者數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル當事者ノ代理人數
人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付ス

ルヲ以テ足ル

第三百三十九條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル
送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス
公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴へ又ハ訴へラル、
得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者
ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル
數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一
人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル
第四百十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬
ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス
第四百十一條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス
第四百十二條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之
ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲

スナ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第四百十三條 訴訟代理人アルキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲スノ權ヲ有スルキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス然レモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルキト雖モ効力ヲ有ス

第四百十四條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所選定ノ届出ハ遅クモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出スルキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ、前項ノ届出ヲ爲サ、ルキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタ

ル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百十五條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシキニ限り効力ヲ有ス

第四百十九條 第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシキニ限り効力ヲ有ス

第四百十六條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人

ニ之ヲ爲スヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルヲ得サルキハ其送達ハ交付
ス可キ書類ヲ管轄市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之
ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭
ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スヲ得

第四百十七條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ
事務所ニ於テ之ニ出會ハサルキハ其事務所ニ在ル營業使用
人ニ之ヲ爲スヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此
場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スヲ得

第四百十八條 第三百十九條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理
人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ
此等ノ者受取ニ付キ差支アルキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ
役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スヲ得

第四百十九條

前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルヲ得サ
ルキハ第四百十六條第二項ニ準シ送達ヲ爲ス可シ但住居ニ
於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルノ明白ナルキニ限ル
前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ
戸ニ之ヲ爲ス

第四百五十條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムキハ交
付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第四百五十一條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可
キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルキニ限り之ヲ施行スルヲ得
前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除クノ外ハ夜間ニ爲
ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間
ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管

轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取りタルキニ限り効力ヲ有ス

第二百五十二條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ地、年月、日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出ダスヲ拒ミタルキ又ハ受取證ヲ作ルヲ能ハサル旨ヲ述フルキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百十四條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ

報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第一百五十三條 外國ニ在テ治外法權ヲ有スル帝國官吏其家族及ヒ從者ニ對シ外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十四條 前條ノ場合ヲ除クノ外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十五條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スヲ得

第一百五十六條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス
送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ

以テ之ヲ證ス

第五百五十七條 原告若クハ被告ノ現在所知レサルキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フヲ能ハス若クハ之ニ從フモ其効ナキヲ豫知スルキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第五百五十八條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

其送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲クルヲ要ス

第五百五十九條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルキハ相當ナル期間ヲ定メ之ヲ宣言スルヲ得
同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間

第一百六十條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

第一百六十一條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限り日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルヲ得

第一百六十二條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス
言渡セシ裁判ニ示シタル呼出ハ之ヲ送達スルヲ要セス但

第三者ヲ呼出ス可キ場合ニ於テ其不在ニテ言渡ヲ爲シタル
キハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁
判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲
スコトヲ得サル行爲ヲ要スルキハ此限ニ在ラス

第六十四條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル
原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲サ、ルキハ
期日ヲ怠リタルモノト看做ス

第六十五條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間
ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場
合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ
遅キ起期ヲ定メタルキハ此限ニ在ラス

第六十六條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨ

リ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第六十七條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一个月ノ期間ハ三
十日トシ一年ノ期間ハ曆ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルキハ其日ヲ期間
ニ算入セス

第六十八條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル
原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ
割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數ハ
三里ヲ超ユルキ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告
ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第六十九條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依テ停止ス其期
間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ

休暇ニ當ルキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル
前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セ
ス
不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限
ル
休暇事件トハ帝國裁判所構成法第三百三十五條第三百三十六條
ニ掲ケタル事件ヲ謂フ
第七十條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ
申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スヲ得但申立ニ因レル
期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除クノ外顯著ナル理由アルキニ
限り之ヲ許ス
第七十一條 期間ハ不變期間ヲ除クノ外當事者ノ合意ノ申
立ヲ以テ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナ
キモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長
スルヲ得然レモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ
特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス
伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス
第七十二條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テ
ノ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲
スヲ得
申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得
同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方
ノ承諾書ヲ提出セサルキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之
ヲ許スヲ得又相手方カ異議ヲ述フルキハ顯著ナル差支ノ
理由及ヒ其差支ヲ除去スルノ特別ナル困難ヲ生シタルキ

ニ限り之ヲ許スヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ
再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非
サレハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ
對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第一百七十三條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ
受命判事又ハ受託判事ノ定ム可キ期日及ヒ期間ニ付テハ其
判事ニモ亦屬スルモノトス

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第一百七十四條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟
行爲ヲ爲スノ權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許スルハ此
限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失

權ヲ爲サシムルヲニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルルキハ此限ニ
在ラス

第一百七十五條 天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メニ不變期
間ヲ遵守スルヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原
狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルキハ其過失ニ非ス
シテ闕席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀
回復ヲ許ス

第一百七十六條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルヲ
要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ
合意ニ因リ之ヲ伸長スルヲ得ス
懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了後ハ原

狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第一百七十七條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲

スノ權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

其書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 原狀回復ノ原因タル事實

第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ

申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之

ヲ爲スコトヲ得

第一百七十八條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル

訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レモ裁判所ハ先

ツ申立ニ付テノ辨論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スル

コトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ

付テハ追完スル訴訟行爲ノ性質ニ從ヒ此等ノ關係ニ於テ行

ハル可キ規定ヲ適用ス然レモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被

告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異

議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第一百七十九條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承

繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滞シタルキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯

論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

受繼ノ遲滞ハ申立人之ヲ疏明シ呼出狀ハ承繼人ニ之ヲ送達

ス
承繼人期日ニ出頭セサルキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ缺席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第百八十條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續ノ破産財團ニ關スルキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ之ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十一條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權ノ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ

新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十二條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルキハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルキハ第百八十條ノ規定ヲ適用ス

第百八十三條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルキハ此情況ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十四條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人ノ欠缺スルキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス
訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第百七十九條、第百八十一條、第百八

十二條ノ規定ニ從フ

第八十五條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶ヘタル地ニ在ルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルヲ得

第八十六條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得
其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得

第八十七條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムルノ効力ヲ有ス
中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行為ハ他ノ一方ニ對シ其効力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲ス可キ裁判ノ言渡ヲ妨クルヲ無シ

第八十八條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第八十九條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キノ合意ヲ爲スヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ホサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス
一个年内ニ前項ノ申立ヲ爲サ、ルキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第九十條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ

中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第九十一條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ

原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ニハ裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場
合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルキハ其價額ヲ掲ク可
シ
準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ訴狀ニモ亦之ヲ適用ス

第九十二條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許スキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルヲ得但民法ノ規定ニ反スルキハ此限ニ在ラス

第九十三條 訴狀カ第九十一條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルキハ相當ノ期間ヲ定メ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キヲ命シ若シ原告此命ニ從ハサルキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第九十四條 訴狀カ第九十一條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十五條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少クモ二十日ノ時間ヲ存スルヲ要ス
外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム
第九十六條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因テ生ス
權利拘束ハ左ノ効力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スヲ得
第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル情況ノ變更ニ因テ變換スルヲ無シ
第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スルノ權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルキハ此限ニ在ラス

第九十七條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲スルハ被告ハ異議ヲ述フルヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルヲ

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルヲ

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルヲ

第九十八條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第九十九條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下ケルヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲サ、ルキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ
適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ効力ヲ消滅セシムルノ結果ヲ生ス
取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムヲ得

第二百條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百一條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スヲ得

四十四

然レモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ其目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲ス可キナ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲ス可キ得ス

第二百二條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭

辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス可キ得

然レモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起サ、

ル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合

ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ

起スヲ得サリシヲ疏明スルキニ限り之ヲ爲ス可キ得

第二百三條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但

其規定ニ因リ差異ノ生ス可キハ此限ニ在ラス

第二百四條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第二百條ニ定

メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十五條ニ定

メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短

縮スルヲ得

前項ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出ス可キ得サルモ雖モ

亦之ヲ爲ス可キ得

本條ノ規定ハ第六十八條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百五條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上

ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ

爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項ヲ口頭辯

論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル

ノ時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲スノ時間ヲ得セ

シム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲スキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面
ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルヲ得

第二百六條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

第二百七條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ
之ヲ提出ス可シ

左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一 無訴權ノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ
被告ノ有効ニ拋棄スルヲ得サルモノナルキ又ハ被告ノ過
失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシ
ヲテ疏明スルキニ限り之ヲ主張スルヲ得

第二百八條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムキ又
ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スル
キハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲
ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看
做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命
スルヲ得

第二百九條 妨訴ノ抗辯完結後裁判所ハ計算事件、財産分別及
ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命

スルヲ得

第二百十條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(抗辯、反訴、再抗辯等)ハ第二百二條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルヲ得

然レモ裁判所ハ時機ニ後レテ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタル爲メニ訴訟完結ノ遅延シタルキハ裁判官ノ心證ニ因リ遅延ノ責アリトスル勝訴ノ原告若クハ被告ニ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルヲ得

第二百十一條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セサリシノ心證ヲ得タルキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルヲ得

第二百十二條 判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分カ訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繋ルキハ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センヲ申立ツルヲ得

第二百十三條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十四條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲メニ用ヰントスル證據方法ヲ申出テ且相手方ヨリ申出テタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ
各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十五條 證據方法及ヒ證據抗辯(證據方法ノ適法、法律上ノ効力及ヒ信用ニ對スル抗辯)ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條第二項及ヒ第二百十一條ノ規定ヲ準用ス

第二百十六條 證據調並ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十七條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十八條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限

リハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

第二百十九條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百二十條 外國ノ現行法又ハ內國ノ地方慣習法、商慣習及ヒ規約ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十一條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キキハ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法又ハ證據原因ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ之ヲ許サス

第二百二十二條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハ

ス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争
點ノ和解ヲ試ムルノ權アリ和解ヲ試ムル爲メニハ當事者ノ
自身出頭ヲ命スルヲ得

第二百二十三條 申立ハ準備書面ニ依リ之ヲ朗讀スルヲ要
ス

準備書面ヲ交付セサルキ又ハ其書面ニ掲ケサル申立アルキ
ハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シ之ヲ朗讀スル
ヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前朗讀シタルモノト異ナル申立ニ付テモ
亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十四條 前條ノ申立ヲ除クノ外準備書面ニ掲ケサル
重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存

スル事項ハ其差異カ附加削除其他ノ變更ニ係ルヲ問ハス申
立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可
キ爲メ差出シタル書面ニ依テ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十五條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲ
シテ其正本抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルキニ限り當事者
ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本并ニ謄本ノ付與
ヲ許スヲ得

判決決定命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類并ニ評議又
ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之
ヲ閱覽スルヲ許サス

第二節 判決

第二百二十六條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ裁判所ハ終

局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルキ亦同シ

第二百二十七條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レモ裁判所ハ事件ノ情況ニ從ヒ一分判決ヲ相當トセサルキハ之ヲ爲サ、ルヲ得

第二百二十八條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スヲ得

第二百二十九條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルキハ裁判

所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルヲ得

第二百三十條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百三十一條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス可キモノトス
然レモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スルノ義務ナシ

第二百三十二條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムルノ權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シ然レモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十三條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ノミ之ヲ爲スコトヲ得

第二百三十四條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス闕席判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百三十六條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ其効力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除クノ外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十七條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所

第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲スモノ

トス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ニ參與シタル判事ノ官氏名

第二百三十八條 判決ノ原本ニハ裁判ニ參與シタル判事署名

捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルキハ其理由ヲ

開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルキハ官等最モ

高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ

之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且

其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十九條 各當事者ハ判決ノ送達アラントナ申立ツル

ヲ得其申立アリタルキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百四十條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ニ署名捺印

セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルヲ

得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判

所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可シ

第二百四十一條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判

決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セラル

第二百四十二條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニ

テモ判決中ノ違算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

可キモノトス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ得

ス更正ヲ言渡ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得
第二百四十三條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全
部若クハ一部ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルルキハ申立ニ因
リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ
判決ノ言渡後直ニ追加裁判ノ申立ヲ爲サルキハ遅クモ
判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之
ヲ爲スヲ要ス
追加裁判ノ申立アルキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯
論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之
ヲ爲スモノトス
第二百四十四條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原
本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルヲ得サ
ルキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十五條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定ス
第二百四十六條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言
渡スヲ要ス
第二百三十四條、第二百三十五條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之
ヲ準用シ又第二百三十六條、第二百四十條及ヒ第二百四十一
條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長并ニ受命判事又ハ受託
判事ノ命令ニ之ヲ準用ス
言渡ヲ爲サル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲サル裁判長并
ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ
送達ス可シ

第三節 闕席判決

第二百四十七條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セザ
ル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ

爲ス

第二百四十八條 出頭セサル一方カ原告ナルキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 出頭セサル一方カ被告ナルキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ供述ニ因リ其請求ヲ正當ト爲スルハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲サルキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百五十條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ證據決定ヲ爲スノ前若クハ後ニ於テ口頭辯論ヲ續行スル爲メニ定ムル期日モ亦第二百四十七條ノ辯論期日ト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲サルキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルキハ出頭セサル

モノト看做ス

第二百五十二條 原告若クハ被告各箇ノ事實證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ辯論ヲ爲シタルキハ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十三條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス可キモノトス然レモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ情況ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルキ
辯論ヲ延期シタルキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十四條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ
即時抗告ヲ爲スヲ得又其決定ヲ取消シタルキハ出頭セサ
リシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可カラズ

第二百五十五條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席
判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレサリ
シキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラ
サル事變ノ爲メニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可
キ情况アルキ

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ
第二百五十六條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判
決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席
判決ノ送達ヲ以テ始マル
故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲ス可キハ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲ス
可キハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日
口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ヘキ決定ヲ以テ之ヲ定ム

第二百五十七條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書
面ヲ差出シテ之ヲ爲ス
其書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決
第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

其書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲メニ必要ナル事
項ヲモ掲ク可シ

第二百五十八條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第二百五十九條 前條ノ場合ヲ除クノ外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百六十條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十一條 故障ヲ適法トスルキハ訴訟ハ闕席前ノ程度

ニ復ス

第二百六十二條 新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ハ闕席判決ト符合スルキハ闕席判決ヲ維持スルヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十三條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルキ闕席ニ因テ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十四條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルキハ第二百五十三條及ヒ第二百五十五條ニ規定シタル場合ヲ除クノ外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルヲ得ス

第二百六十五條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

第二百六十六條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ且本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十七條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルキハ受

得 訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルヲ得

第二百六十八條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十九條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第三 爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻撃、防禦ノ方

法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯證據方法并ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百七十條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十一條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十二條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

原告若クハ被告カ出頭セサルキハ準備手續ニ於テ争ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結シ其他ニ付テハ申立ニ因テ關席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十三條 事實又ハ證書ニ付キ受命判事ノ面前ニ於テ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミタルキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知

リタルヲテ疏明スルキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スル
ヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十四條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例
トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一
名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルヲ得

證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第二百七十五條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可
キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サシテ受訴裁判
所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ
面前ニ於テ之ヲ爲ス可キハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十六條 證據調ニ付キ不定時間ノ障碍アルキハ申立

ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過セシムルモ訴訟
手續ヲ遲滯セシメサル限リハ其證據方法ヲ用ヰルヲ得

第二百七十七條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 證ス可キ係爭事實

第二 證據方法殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キハ其
氏名、身分、職業及ヒ住所

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ氏名

第二百七十八條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在
テハ原告若クハ被告ヨリ以前ノ辯論ニ基キ之ヲ申立ツルヲ
得ス

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十九條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キハ

裁判長證據決定言渡ノ際受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルキハ受命判事之ヲ定ム受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百八十條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタルヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十二條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲

ス其囑託ニ付テハ第五百五十三條及ヒ第五百五十六條ノ現定ヲ準用ス

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルノ權ヲ有ス此命令ハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十四條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルヲ得ス且其判事之ヲ裁判スルノ權ヲキキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

第二百八十五條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限りハ證據調ヲ爲ス可シ

第二百八十六條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得
原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲メニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前
期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルキニ限り判決ニ接
着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス
第二百八十七條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムルノ必要アルキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシ
キト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム
第二百八十八條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スルノ期日ナリトス
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ

命シタルキハ其證據決定中ニ併セテ受訴裁判所ニ於ケル口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十九條 裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ證據調ノ費用ヲ舉證者ヨリ豫納セシムルコトヲ得若シ其期間内ニ豫納セサルキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人證

第二百九十條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スルノ義務アリ
第二百九十一條 公ノ吏員ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル情況ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ

許可ヲ得タルキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣
ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス
此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐アルキニ限り之ヲ
拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ
第二百九十二條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問
ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十三條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ
要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ期日
- 第四 出頭セサルキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十四條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人
トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲
ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲メニ證人ノ闕勤
ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルキハ其旨ヲ裁判所
ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムルノ囑託ヲ爲スノ義務アリ

第二百九十五條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由
ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其
不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以下ノ罰金ヲ言
渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰
金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得
證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ

停止スルノ効力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及
ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之
ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十六條 證人其出頭セザリシコト後日ニ正當ノ理由
ヲ以テ辯解フルキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ
證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之
ヲ爲スコトヲ得

第二百九十七條 皇族證人ナルキハ受命判事又ハ受託判事其
所在ニ就キ訊問ヲ爲ス
各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所
在地外ニ滞在スルキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス
帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中

ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十八條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルキ但姻族
ニ付テハ婚姻ノ解除シタルキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ
仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ムノ權利アル旨ヲ告
ク可シ

第二百九十九條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 公ノ吏員又ハ公ノ吏員タリシ者カ其職務上默秘ス
可キ義務アル情況ニ關スルキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分

又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招クノ恐アルキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシム可キキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルヲ能ハサルキ

第三百條 證人ハ第二百九十八條第一號及ヒ第二百九十九條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家屬ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ成

立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行爲

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルキハ證言ヲ拒ムヲ得ス

第三百一條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

原因ヲ説明シテ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スルノ義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百二條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シ

タル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十九條第一號ノ
場合ニ於テ爲シタル拒絶ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ
所屬廳ノ裁定ニ任ス
原告若クハ被告カ出頭セサルキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟
酌シテ決定ヲ爲ス
右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停
止スルノ効力ヲ有ス

第三百三條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル
原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルキハ申立ヲ要セス
シテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絶ニ因テ生シタル費用ノ賠
償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス
證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得
此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス

軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託
シテ之ヲ爲ス

第三百四條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間
ニ第二百九十八條第一號乃至第三號ノ關係アルキハ其證人
ヲ忌避スルコトヲ得

第三百五條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此時
限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ疏明ス
ルキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得
忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百六條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ
之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ

得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス可キ得

第三百七條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ

然レモ宣誓ハ特別ノ原因アルキ殊ニ其許否ニ付キ疑ノ存スルキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百八條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百九條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽

證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百十條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百一條乃至第三百

三條ノ規定ヲ適用ス

第三百十一條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之

ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ

發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十八條及ヒ第二百九十九條ノ第三號并ニ

第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕スルノ權利アリテ之ヲ

行使セサル者但第二百九十九條第三號并ニ第四號ノ場
合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス
可キヲ申立テラレタルキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十二條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場
所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人互ニ齟齬シタル供述ヲ爲スルハ之ヲ對質セシムルヲ
得

第三百十三條 證人訊問ハ證人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住
居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於
テ證言ノ信用ニ關スル情况殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問
ヲ爲ス可シ

第三百十四條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ牽

連シテ供述セシム可シ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知りタル原因ヲ穿
鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十五條 證人ハ其供述ノ稿本ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用
ルヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用ルヲ得

第三百十六條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スル
ヲ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルヲ得然レモ當事者
ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メニ其必要ナリトスル問
ヲ發センヲ裁判長ニ申立ツルヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス
第三百十七條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シ
タルヤ又ハ宣誓セステ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十八條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルキ

第二 證人訊問ノ完全ナラサルキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ渉ルキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルキ

第五 其他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルキ

第三百十九條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メニ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭ス

ル能ハサルキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在テ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルキ

第三百二十條 第二百九十五條、第二百九十六條、第三百三條及

ヒ第三百十條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲スノ權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴

裁判所ノ裁判ヲ求ムルヲ得
證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命
スルヲ得

第三百二十一條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問
ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルヲ得其後ハ相手方ノ
承諾ヲ得ルキニ限り之ヲ拋棄スルヲ得

第三百二十二條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲メニ旅
行ヲ要スルキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルヲ得
其金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルヲ
得

舉證者ノ豫納シタル金額不足スルキハ職權ヲ以テ其不足額
ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十三條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ
設ケサル限りハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十四條 鑑定ニ因テ證據ヲ舉ケントスル原告若クハ
被告ハ鑑定ス可キ事項ヲ申立ツ可シ

第三百二十五條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定
ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名ニ制
限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ
任命スルヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス
可キ旨ヲ當事者ニ催告スルヲ得
當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スヲ合意シタルキハ裁判
所ハ其合意ニ從フ可シ然レモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ選
定ヲ一定ノ員數ニ制限スルヲ得

第三百二十六條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルキハ裁判所ハ此事項ニ付キ當事者ヲ審訊シタル後外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十七條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルキハ之ヲ爲スノ義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若クハ職業ヲ常務トシテ從事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ從事スル爲メニ公ニ任命セラレ若クハ委任セラレタル者

第三百二十八條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ムノ權利アリ

公ノ吏員ハ其所屬廳ニ於テ異議アルキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タルノ義務ナキト雖モ本條第一項ノ場合ヲ除クノ外鑑定ヲ爲スノ義務アリ

第三百二十九條 鑑定ヲ爲スノ義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲メニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百三十條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行ス可キ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ

第一 鑑定ノ結果ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十二條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十五條及ヒ第三百三十一條第一號并ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十三條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十四條 實驗ノ爲メ特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ情況ヲ其智識アル者ノ訊問ニ因テ確定ス可キキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書證

第三百三十五條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十六條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センヲ申立テ、之ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スルノ義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルヲ得ルキ

第三百三十八條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルキト雖モ亦同シ

第三百三十九條 申立ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

- 第一 證書ノ表示
- 第二 證書ニ依リ證ス可キ事實
- 第三 證書ノ旨趣
- 第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル情况

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因

第三百四十條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルヲ自白スルキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルキハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス

第三百四十一條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒ相手方本人ヲ訊問ス可シ相手方カ官廳ナルキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム

可シ

第三百四十二條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セ
スト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハ
ス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受
ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル
目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメ
タルコトノ明確ナルキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正
當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出サ、ルキハ裁判所ハ其
意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當
ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ
差出サ、ルキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ
生ス

第三百四十三條 舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手
ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル
爲メノ期間ヲ定メンコトヲ申立テ、之ヲ爲ス

第三百四十四條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナ
ル理由ニ因リ證書ヲ提出スルノ義務アリ然レモ強テ證書ヲ
提出セシムルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十五條 第三百四十三條ニ從ヒ爲ス可キ申立ヲ辯明
スルニハ第三百三十九條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要
件ヲ履ミ且證書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疏明ス可シ

第三百四十六條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其
申立カ前條ノ規定ニ適スルキハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ
定ム可シ

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルキ又ハ舉證者カ訴ノ提起

訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遲延シタルキハ相手方ハ前項ノ
期間ノ滿了前ニ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルヲ得
第三百四十七條 舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公
吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付
ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレシトシテ申立テ、之ヲ爲ス
此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシ
テ取寄スルヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス
官廳又ハ公吏カ第三百三十七條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出ス
ルノ義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムキハ第三百四十三條
乃至第三百四十六條ノ規定ヲ適用ス
第三百四十八條 證據決定ヲ爲シタル後其決定中ニ掲ケタル
係爭事實ニ付キ第三百四十三條及ヒ第三百四十七條ノ規定
ニ從ヒ書證ヲ申出テタル場合ニ於テ證書ノ取寄ニ必要ナル

手續ノ爲メニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ
於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スルノ故意ヲ以テ又ハ甚
シキ怠慢ニ因リ書證ヲ早く申出テサリシトノ心證ヲ得タル
キハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルヲ得
第三百四十九條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀
損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障碍アルキハ受命
判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルヲ
得
受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ調書ニ
添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルキハ第百八條第二項ノ規
定ニ從ヒ作りタル抄本ヲ之ニ添附ス可シ
第三百五十條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以
テ之ヲ提出スルヲ得然レモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出

ヲ命スルヲ得
私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未ダ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ効力又ハ解釋ニ付テノミ爭ヲ爲スルハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉證者ニ原本ノ提出ヲ命スルヲ得提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤヲ裁判ス
第三百五十一條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルキニ限リ此證據方法ヲ拋棄スルヲ得
第三百五十二條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコト申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ
第三百五十三條 私署證書ノ真正ニ付キ爭アルキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得
第三百五十四條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因テ之ヲ爲ス
證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲メニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ
眞正ナリトノ自白又ハ證明アリタル適當ノ對照書類ナキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル
心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必用ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サ
シメタル後之ヲ爲ス

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提
出セサルキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ
對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハサルキ又ハ書様ヲ
變シテ手記シタルキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ
其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スヲ得

第三百五十五條 提出シタル證書ハ直ニ之ヲ還付シ又適當
ナル場合ニ於テハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ
然レモ證書ノ偽造又ハ變造ナリトノ爭アルキハ檢事ノ意見
ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルヲ得ス

第三百五十六條 公正證書ノ眞正ナラサルヲ又ハ偽造若クハ

變造ナルヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡
意若クハ重過失ノ責アルキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス
又私署證書ノ眞正ナルヲ眞實ニ反キテ爭フキハ前項ト同
一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十七條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ
事跡ノ紀念又ハ權利ノ證徴ノ爲メ作りタル割符界標等ノ如
キモノニモ之ヲ準用ス

第九節 檢證

第三百五十八條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ
事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十九條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立
會ヲ命スルヲ得
受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又

ハ區裁判所ニ囑託スルヲ得

第三百六十條 檢證ヲ爲スノ際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十一條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調べタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルヲ得

第三百六十二條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルキハ

直ニ其訊問ヲ爲スヲ通例トス

第三百六十三條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ノ稿本其他覺書ヲ以テ答辯ヲ爲スヲ得ス

第三百六十四條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因テ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルヲ得

第三百六十五條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲スキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キハ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス

法律上代理人數人アルキハ其一人ヲ訊問ス可キ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十一節 證據保全

第三百六十六條 證據ヲ紛失シ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アル
キハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申
立ツルヲ得

第三百六十七條 訴訟カ既ニ繫屬シタルキハ此申請ハ受訴裁
判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又
ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲ス
ヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申
請ヲ爲スヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第三百六十八條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 相手方ノ表示

第二 證據調ヲ爲ス可キ事實

第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ス可キ
キハ其表示

第四 證據ヲ紛失シ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アル理由此
理由ハ之ヲ説明ス可シ

第三百六十九條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之
ヲ爲スヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方
法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此
決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第三百七十條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ
申請ノ謄本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲メニ相手方ヲモ呼出

ス可シ

切迫ナル危険ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出
ス可シ得サリシキト雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十一條 證據調ハ本章第六節第七節及ヒ第九節ノ規
定ニ從ヒ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ
各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スルノ權利アリ
受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命
シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十二條 證據調ハ第三百六十六條ノ條件ナキキト雖
モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十三條 申立人カ相手方ヲ指定セサルキハ申立人自
己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ疏明スル

場合ニ限り其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防
衛ノ爲メニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十四條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判
所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル
キニ限り地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十五條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲ス
コトヲ得

第三百七十六條 起訴アリタルキハ裁判所書記ハ訴狀又ハ調
書ノ謄本ヲ被告ニ送達セシム
準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第三百七十七條 原告若クハ被告ハ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ陳述ヲ爲シ得ヘカラサル申立及ヒ事實上ノ主張ヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルヲ得

第三百七十八條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナク三日ノ期間ヲ存スルヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時マテニ短縮スルヲ得
送達ヲ外國ニ於テ爲ス可キハ情況ニ應シテ時間ヲ定ム可シ

第三百七十九條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
第三百八十條 數回ノ妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ且本案ノ辯論前ニ提出ス可キノ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯ニ限り之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムノ權利ナシ然レモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルヲ得

第三百八十一條 第二百二十四條、第二百六十七條乃至第七十三條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス
然レモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ
第三百八十二條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キヲ申立ツルヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得
當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルキハ調書ヲ以テ之ヲ明確

ナラシム可シ

和解ノ調ハサルキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルキハ此カ爲メニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第二節 督促手續

第三百八十三條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件付ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發センコトヲ申立ツルコトヲ得
申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於

テ爲ン若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キキハ督促手續ヲ許サス

第三百八十四條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス

此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ物上管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十五條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭

ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

其申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因若シ請求ノ數箇

ナルキハ其各箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因

第三 支拂命令ヲ發センコトノ申立

第三百八十六條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキトノ顯ハル、キハ其申請ヲ却下ス
請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルヲ得サルキハ亦其申請ヲ却下ス然レモ數箇ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルキハ其理由アリト見ユルモノニ限り申請ヲ許容ス
右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス然レモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴追スルヲ妨クルヲ無シ
第三百八十七條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス
支拂命令ニハ第三百八十五條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此

命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ
前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其地ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテニ之ヲ短縮スルヲ得
第三百八十八條 權利拘束ノ効力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル
第三百八十九條 支拂命令ヲ送達シタルキハ其旨ヲ債權者ニ通知ス可シ
第三百九十條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スヲ得但其理由ヲ開示スルヲ要セス
第三百九十一條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナ

ル時間ニ異議ヲ申立ツルキハ支拂命令ノ効力ヲ失ヒ權利拘束ノ効力ヲ存續ス然レモ數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルキハ支拂命令ハ其地ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ効力ヲ有ス

第三百九十二條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十八條ノ規定ニ從ヒ之ヲ定ム

第三百九十三條 請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルトナ債權者ニ通知ス可シ
債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一个月ノ期間

内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起サ、ルキハ權利拘束ノ効力ヲ失フ
第三百九十四條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起サ、ルキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス

第三百九十五條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルキニ限ル
右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル訴訟手續ノ費用ヲ掲ク可シ
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス

ヲ得

第三百九十六條 執行命令ハ懈怠ニ因リ言渡ス假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十六條乃至第二百六十五條ノ規定ニ從ヒ故障ヲ申立ツルヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十三條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マル

第三百九十七條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス
此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百九十八條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第三百九十九條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受クルモノトス但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルヲ得スト明記セサルキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ得サルキニ限ル

第四百條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ得ス但故障ヲ許サル闕席判決ニ對シテハ懈怠ヲカリシヲ理由トスルキニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ得

第四百一條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ヲ

クシテ之ヲ取下クルコトヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スルノ結果ヲ生ス

第四百二條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ

判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ

判決ヲ補充シタルキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對ス

ル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百三條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之

ヲ爲ス

第四百四條 控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 控訴セラル、判決

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

第四百五條 準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ控訴狀ニモ亦之

ヲ適用ス

準備書面タル控訴狀ニハ特ニ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 判決ニ對シ不服ヲ申立ツル部分及ヒ其判決ニ付キ

申立ツル變更ノ理由

第二 主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法

第三 一定ノ申立

第四百六條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式

ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ訴訟指揮

上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百七條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存ス可

キ時間ニ付テハ第九十五條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出

ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第二百條ノ規定ヲ適用ス
前項ノ場合ニ於テモ亦第二百四條ノ規定ヲ適用スルヲ得
第四百八條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之
ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナ
ル事實及ヒ證據方法ヲ掲ク可シ

第四百九條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルキ又ハ控訴
期間ノ經過シタルキト雖モ附帶控訴ヲ爲スヲ得
闕席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルニ付テノ規定ハ
附帶控訴ニ因テ闕席判決ニ對シ不服ヲ申立ツルニモ亦之ヲ
適用ス

第四百十條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ
第一 控訴ヲ不合法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルキ
第二 控訴ヲ取下ケタルキ

被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルキハ之ヲ獨立
ノ控訴ト看做ス

第四百十一條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又
ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲クルキハ之ヲ控訴人ニ送達
ス可シ

第四百十二條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ニ於ケ
ル第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差
異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百十三條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルキハ其兩控
訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ通例トス

第四百十四條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間
ノ未タ經過セサルキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延
期ス

闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障
ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルキハ控訴ニ付テノ辯論
及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十五條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ
定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百十六條 當事者ハ其控訴ノ申立ヲ會得セシムル爲メ及
ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ調査スル爲メ必要ナ
ル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス
可シ

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正
若クハ補完ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開
シテ之ヲ爲サシム可シ

第四百十七條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルキト雖モ之ヲ許

サス

第四百十八條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモ
ノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於
テ提出シ能ハサリシトナテ疏明スルキニ限り之ヲ主張スル
ヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムトヲ得ス然レモ裁
判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シ
タル辯論ヲ命スルヲ得

第四百十九條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃防禦
ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルヲ得

第四百二十條 新ナル請求ハ第九十七條第二號及ヒ第三號
ノ場合ヲ除クノ外相殺スルヲ得ヘキモノニシテ且原告若
クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリ

シテヲ疏明スルキニ限り之ヲ起スヲ得

第四百二十一條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲サ、ル

陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スヲ得

第四百二十二條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二

審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

第四百二十三條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否又控訴ヲ

法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヲ職

權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クキハ判決ヲ以テ

控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十四條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限

リ之ヲ變更スルヲ得

第四百二十五條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ

關スル總テノ争點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要ト

スルモノハ第一審ニ於テ此争點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲サ
、ルキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲スモノ
トス

第四百二十六條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙

ホ辯論ヲ必要トスルキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可

シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ナルキ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ニ對スル故

障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付

キ裁判ヲ爲シタルモノナルキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル場合ニ於テ不

服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲

シタルモノナルキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ追行ヲ爲スノ權ヲ保留シタルモノナルキ

第四百二十七條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スヲ得

第四百二十八條 控訴ヲ理由ナシトスルキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十九條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルヲハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲スヲ得

第四百三十條 第二百十一條ノ規定ニ從ヒ防禦ノ方法ヲ却下

スルキハ其防禦ノ方法ヲ主張スルノ權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルキハ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ申立ツルヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百三十一條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ繫屬スルモノトス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシ

トノ顯ハル、キニ限り前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ

返還ス可キヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ
第四百三十二條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルキハ

出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百三十三條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕席判決ノ申立ヲ爲スルハ第一審裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ牴觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做ス可シ

第四百三十四條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルヲ得

第四百三十五條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

第四百三十六條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第四百三十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受クルモノトス但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルヲ得スト明記セサルキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ得サルキニ限ル

第四百三十八條 上告ハ法律ニ背シタル裁判ナルヲ理由トスルキニ限り之ヲ爲スヲ得

第四百三十九條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルキハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百四十條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノト看做ス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ

裁判ニ參與シタルキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除外

ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認め

タルニ拘ハラス裁判ニ參與シタルキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違テ不當ニ認めタルキ

第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從

ヒ代理セラレザリシキ

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯

論ニ基キ裁判ヲ爲シタルキ

第七 裁判ニ理由ヲ付セサルキ

第四百四十一條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百四十二條 上告人ハ上告ノ提起前ニ上告金十圓ヲ上告

裁判所書記課ニ預ク可シ但訴訟上ノ救助ヲ受ケタルキハ此

限ニ在ラス

判決ヲ破毀シタル場合ニ於テハ上告金ヲ還付ス

第四百四十三條 左ノ場合ニ於テハ上告金ヲ沒收ス

第一 上告ヲ許サル旨判決ヲ以テ言渡シタルキ

第二 許シタル上告ヲ理由ナシトシテ判決ヲ以テ棄却シ

タルキ

第三 上告人カ上告ヲ取下ケタルキ

前項ノ場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ト雖モ上告金ヲ追納スルノ義務アリ此場合ニ於テハ第一百條ノ規定ヲ準用ス

第四百四十四條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

第四百四十五條 上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 上告セラル、判決

第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

第四百四十六條 準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ上告狀ニモ亦之ヲ適用ス
準備書面タル上告狀ニハ特ニ判決ニ對シ不服ヲ申立ツル部分及ヒ其判決ニ付キ申立ツル破毀ノ部分ヲ記載シ且上告申立ニ理由ヲ付スル爲メ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其法則ノ表示

第二 訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示

第三 法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ又ハ遺脱シ又ハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルキハ其事實ノ表示

第四百四十七條 上告狀ニハ上告金ノ預リ證書又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル證明書ヲ添フ可シ若シ之ヲ添ヘサルキハ上告ヲ提起セサルモノト看做ス

第四百四十八條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サ、ルキ又ハ第四百三十八條ノ規定ニ依ラサル

キハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルキハ上告ヲ取下ケタルモ
ノト看做ス但出頭セサリシヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十
分ナル理由ヲ以テ辯解シタルキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十九條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存
ス可キ時間ニ付テハ第九十五條ノ規定ヲ適用シ答辯書
ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第二百條ノ規定ヲ適用
ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百四條ノ規定ヲ適用スルヲ得
第四百五十條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ
之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ク可シ

第四百五十一條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スヲ得
此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百五十二條 答辯書ニ附帶ノ陳述ヲ掲ケタルキハ之ヲ上
告人ニ送達ス可シ

第四百五十三條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第
一審訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生
スルモノハ此限ニ在ラス

第四百五十四條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ
付キ調査ヲ爲ス

第四百五十五條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所
カ其裁判ノ憑據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四
百四十六條第二號及ヒ第三號ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟
酌スルヲ得

證據調ヲ必要トスルキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ
第四百五十六條 上告ヲ理由アリトスルキハ不服ヲ申立テラ

レタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スル
キハ其違背シタル部分ニ限リ訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百五十七條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百六十條
ノ規定ヲ除クノ外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件
ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送
ス可シ

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ
裁判ヲ爲スヲ要ス

第四百五十八條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケ
ル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯
論ニ際シ提出スルノ權利アリ

第四百五十九條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上

告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル
ノ基本トシタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲
スノ義務アリ

第四百六十條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判
ヲ爲ス可シ

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違
背シタル爲メニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ
熟スルキ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲メニ判決
ヲ破毀スルキ

第四百六十一條 上告ヲ理由ナシトスルキハ之ヲ棄却ス可シ
第四百六十二條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルキト
雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百六十三條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 闕席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トナ同時ニ爲シタルキノ訴訟手續

第四 口頭辯論ノ延期

第五

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルコト

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百六十四條 抗告ハ此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ノ外尙ホ口頭辯論ヲ經スシテ爲シタル左ノ裁判ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第一 訴訟手續ニ關スル申請ヲ却下シタル決定及ヒ命令

第二 強制執行手續ニ於テ爲シタル決定及ヒ命令

第四百六十五條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百六十六條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

訴訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ嘗テ繫屬シタルキ又ハ證人
鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出スル義務アリトノ宣言ヲ受ケ
タル第三者ヨリ抗告ヲ爲スキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス可ク得
第四百六十七條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ憑據
ト爲ス可ク得

第四百六十八條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判
所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ
理由アリトスルキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルキ
ハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ
抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲ
モ送付ス可シ

第四百六十九條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル
場合ニ限り執行停止ノ効力ヲ有ス

然レモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁
判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコ
ト得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラ
レタル裁判ノ執行中止ヲ命スルコト得

第四百七十條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直チニ抗告裁判所
ニ之ヲ爲ス可ク得
抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ
爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコト
得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルキハ不服ヲ申立テ
ラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ送付シ且
其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百七十一條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルヲ得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第四百七十二條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヲ職權ヲ以テ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百七十三條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルハ抗告裁判所ハ前裁判ヲ廢棄シ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立

テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百七十四條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ

抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シ之ヲ爲スヲ得

第四百七十五條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ

抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第二百五十四條第六百八十九條第二項及ヒ第

七百八十條第三項ノ場合ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗
告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルキハ急迫ナラスト認メタル場
合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス
再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルキハ不變期間ノ滿了後
ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得
前條ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不
變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所
ハ其申請ヲ正當ト認メサルキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可
シ

第四編 再審

第四百七十六條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取
消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得
當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルキハ原狀回復
ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴ニ付テノ裁判カ確定
スルマテ之ヲ中止ス可シ

第四百七十七條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求
ムルコトヲ得

- 第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシキ
- 第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ
裁判ニ參與シタルキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除外
ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシキハ此限ニ在ラス
- 第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メ

ラレタルニ拘ハラス裁判ニ參與シタリシキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從

ヒ代理セラレサリシキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消

ヲ主張シ得ルモノナルキハ取消ノ訴ヲ許サス

第四百七十八條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審

ヲ求ムルヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴

訟ニ關シ犯シタル判事カ裁判ニ參與シタリシキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人

又ハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人カ

罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシ

キ

第四 證人鑑定人又ハ證人トシテ訊問ヲ受ケタル相手方

カ供述ニ因リ又通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因

リ偽證ノ罪ヲ犯シタリシキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト

爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタ

リシキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ

前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立

テラレタル判決ト抵觸スルキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スル

ヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可

キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ
判決カ確定ト爲リタルキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑
事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルキニ限り再審ヲ
求ムルコトヲ得

第四百七十九條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過
失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附
帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシキニ
限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十條 同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ不服ヲ
申立テラレタル判決前ニ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由
ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立
テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルキニ限ル

第四百八十一條 再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁

ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス

同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判
所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ
管轄ニ專屬ス

督促手續ニ依テ區裁判所ノ發シタル支拂命令ニ對スル訴ハ
其支拂命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レモ其請
求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管
轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百八十二條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條
ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁
判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百八十三條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ
此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ

始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル
判決確定ノ日ヨリ起算シテ五今年ノ滿了後ハ訴ヲ爲スヲ得ス

前二項ノ規定ハ代理欠缺ニ因ル取消ノ訴ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其訴訟能力ノ欠缺スルキハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百八十四條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

第四百八十五條 準備書面タル訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 不服ノ理由

第二 其理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法

第三 如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立

第四百八十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得
第四百八十七條 原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラス再審ノ理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ説明ス可シ

第四百八十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セ
ス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ
因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百八十九條 本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理
由ノ存スル部分ニ限り更ニ之ヲ爲ス可シ

裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ノ理由及ヒ許否ニ付キ
辯論及ヒ裁判ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯
論ハ再審ノ理由及ヒ許否ニ付テノ辯論ノ續行ト看做ス

第四百九十條 原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變更ハ相手方モ亦
再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ申立テタルキニ限り之ヲ爲
スヲ得

第四百九十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルキハ上告裁判所ハ
再審ノ理由及ヒ其許否ニ付テノ辯論ノ完結カ係爭事實ノ確

定及ヒ斟酌ニ繋ルキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百九十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判
決ニ對シ一般ニ爲スヲ得ヘキキニ限り之ヲ爲スヲ得

第四百九十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者
ノ債權ヲ詐害スルノ目的ヲ以テ判決ヲ爲サシメタリト主張
スルキハ原狀回復ノ訴ニ因レル再審ノ規定ヲ準用ス
此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百九十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價
證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ハ其請求ヲ起ス
ノ理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルヲ得
ヘキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルヲ得

第四百九十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ
掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルヲ要ス

第四百九十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ム
ヲ得ス然レモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ
付キ辯論ノ分離ヲ命スルヲ得

第四百九十七條 反訴ハ之ヲ爲スヲ得ス
證書ノ眞否及ヒ第四百九十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關
シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スヲ得

書證ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲ス可キ得
第四百九十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ
承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書
訴訟ヲ止ムルヲ得

第四百九十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ
又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見ユルキハ原告ノ請求ヲ
却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原
告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサルキハ
此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許サ、ルモノトシテ之ヲ却下ス可シ
被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異
議若クハ證書訴訟ニ於テ許サ、ル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ
抗辯シタルキト雖モ亦同シ

第五百條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務
タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサルキハ被告ノ異
議ハ證書訴訟ニ於テ許サ、ルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第五百一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡
ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ
若シ判決主文ニ前項ノ留保ヲ掲ケサルキハ第二百四十三條
ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルヲ得
權利ノ留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ關シテハ
之ヲ終局判決ト看做ス

第五百二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルキハ訴訟ハ通常
ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス
此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリ
シトノ顯ハル、キハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且

其生セシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ
又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノ、辨濟
ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ
右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルキハ闕席判決ニ
關スル規定ヲ準用ス

第五百三條 第四百三十條及ヒ第四百三十一條ノ規定ハ證書
訴訟ニ之ヲ適用セス

第五百四條 商法ニ規定シタル爲替證券ニ因ル請求ヲ證書訴
訟ヲ以テ主張スルキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲クル特
別ノ規定ヲ適用ス

第五百五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁
判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得
數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キキハ支拂地ノ裁

判所ノ外被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各
之ヲ管轄ス

第五百六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ掲クルヲ
要ス

訴ノ許ス可キモノナルキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム
口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナクモ二十四時ノ
時間ヲ存スルヲ要ス

第六編 強制執行

第一章 總則

第五百七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因テ之ヲ爲ス

第五百八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ滿了前ニハ確定セサルモノトス
判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第五百九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルキハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス
訴訟カ尙ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス
判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與ス

ルコトヲ得サルキニ限り上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變
期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書ヲ以テ足ル
第五百十條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムルノ申立アルキハ裁判
所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメシテ
強制執行ヲ一時停止ス可キヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強
制執行ヲ爲ス可キヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル
強制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得
保證ヲ立テシメシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ
償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スルキニ限り之ヲ
許ス
右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シ
テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
第五百十一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ

爲ス可シ

第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決
第二 證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決
第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ
付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ闕席判決
第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決
第五 養料ヲ支拂フノ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ
時間及ヒ其提起前最後ノ三個月間ノ爲メニ支拂フ可キ
モノナルキニ限ル
第五百十二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ
爲ス可シ
第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取明渡
使用占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所

持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルトニ關シ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二 占有ノミニ係ル訴訟

第三 雇主ト雇人トノ間ニ起リタル訴訟但雇期限一個年ヲ超過シタル契約ニ係ラサルキ

第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ件フ旅行荷物ノ運送料

ロ 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル之ニ件フ旅行荷物金錢又ハ有價物

第五 其他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ二

十圓ヲ超過セサル訴訟但其物品ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス

第五百十三條 左ノ場合ニ於テハ前二條ニ掲ケタル外財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限り債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント申出ツルキ

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行ヲ中止セハ償ヒ難キ損害又ハ計リ難キ損害ヲ受ク可キヲ説明スル

キ

第五百十四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク可キヲ説明シタルキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 第五百十一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可

第二 第五百十二條及ヒ第五百十三條ノ場合ニ於テハ債
權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スルコ

第五百十五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者ノ申立ニ因
リ債權者豫メ保證ヲ立ツルキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣
言スルコヲ得

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコヲ申出テサルキハ債務
者ノ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行
ヲ免カル、コヲ許ス可シ

第五百十六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接着スル口頭辯
論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百十七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ掲ク可
シ

第五百十八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ

於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲サ、ルキ又ハ判決ノ假執行ヲ
宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルキハ第二百四十三條
及ヒ第二百四十四條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコヲ得

第五百十九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言
ナカリシモノ又ハ條件附ノ假執行ノ宣言アリタルモノハ上
訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限り口頭辯論ノ進行中ニ
爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ決定ヲ
以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第五百二十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破
毀又ハ變更スル判決ノ言渡アルキハ假執行ハ其廢棄若クハ
破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ効力ヲ失フ
假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變

更スルキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノ、辨
濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可シ

第五百二十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付
キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ

口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十四條ノ規定ハ此場合ニ於
テハ之ヲ適用セス

第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ
申立ツルコトヲ得ス

第五百二十二條 假執行ヲ宣言シタル判決ニ對シ故障ヲ申立
テ又ハ上訴ヲ起シタルキハ第五百十條ノ規定ヲ準用ス

第五百二十三條 本節ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ
立ツルノ義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲ス
コトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍

ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立テ又ハ供
託ヲ爲スコトヲ得
保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタルコトニ付テハ求ニ因リ證明書
ヲ付與ス可シ

第五百二十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制執行ハ本邦
ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタル
キニ限り之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムルノ訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有ス
ル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ヲ
キキハ第十七條ノ規定ニ從ヒ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル
裁判所之ヲ管轄ス

第五百二十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシテ之ヲ
爲ス可シ

執行判決ヲ求ムルノ訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタルヲ證明セサ

ルキ

第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムルヲ得サル行爲

ヲ執行セシム可キキ

第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサ

ルキ

第四 敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セサリルキ但訴訟

ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ

又ハ法律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セサリ

シキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルキ

第五百二十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ

基キ之ヲ爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所
ニ繫屬スルキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムルノ申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第五百二十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス

其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強制執行ノ爲メ
原告某若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ
第五百二十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルキ又ハ

假執行ノ宣言アリタルキニ限り之ヲ付與ス

判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ保證ヲ立ツルヲ除クノ外他ノ

條件ニ繋ル場合ニ於テハ債權者カ信スルニ足ル可キ證明書
ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ證スルキニ限り執行力アル
正本ヲ付與スルコトヲ得

第五百二十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者
ノ承繼人ノ爲メニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者
ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判
所ニ於テ明白ナルキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルキニ限ル
其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルキハ之ヲ執行文ニ記載ス可
シ

第五百三十條 第五百二十八條第二項及ヒ第五百二十九條ノ
場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルキニ限り
之ヲ付與スルコトヲ得
裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スル

コトヲ得

右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百三十一條 第五百二十八條第二項及ヒ第五百二十九條

ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキハ原告ハ判決ニ基キ

執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得

第五百三十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テ

タルキハ其執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所

之ヲ裁判ス

裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシ

メ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保

證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

第五百三十三條 債權者カ執行力アル正本ノ數通ヲ求メ又ハ

前ニ付與シタル正本ヲ返還セスシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ

求ムルルキハ裁判長ノ命令アルキニ限り之ヲ付與スルヲ得
裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊ス
ルヲ得

相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通ヲ付與シ又ハ
更ニ正本ヲ付與シタルキハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ
正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルキハ其旨ヲ
明記ス可シ

第五百三十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原
告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メニ之ヲ付與スル旨又何レノ日時
ニ之ヲ付與スル旨ヲ記載ス可シ

第五百三十五條 執行力アル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁
判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本邦ノ裁判區域内ニ及フモノ
トス

第五百三十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制
執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルキハ數通ノ執行
力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制
執行ヲ爲スノ權利ヲ有ス

第五百三十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁
判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルキハ其所在地
ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第五百三十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者
ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附加スル執行文ニ表示シ且其判決ヲ
送達シタルキニ限り之ヲ始ムルヲ得

判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來
ニ繋ルキ又ハ判決ノ執行力判決ニ表示シタル債權者ノ承繼
人ノ爲メニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對

シ爲ス可キハ執行ス可キ判決ト共ニ之ニ附加スル執行文
ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルヲ要ス
若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルキハ亦其證書ノ謄本
ヲ送達スルヲ要ス

第五百三十九條 請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ繫ルキハ其
日時ノ滿了後ニ限り強制執行ヲ始ムルヲ得

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルヲニ繫ルキハ債權者カ
保證ヲ立テタルヲニ付テノ公正ノ證明書ノ提出後ニ限り其
執行ヲ始ムルヲ得

第五百四十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ
爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限り
之ヲ始ムルヲ得
其官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百四十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキハ
ニ限り執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲メニ區裁判所書記ノ補助ヲ
求ムルヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノ
ト看做ス

第五百四十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因テ爲ス行爲及ヒ
職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損
害ヲ生セシメタルキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百四十三條 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行
ヲ委任シタルキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルキト雖モ
支拂其他ノ給付ヲ受取り其受取りタルモノニ付キ有効ニ受
取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ

盡シタルキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ交付スルヲ得
第五百四十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ
債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行爲
ヲ實施スルノ權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠
缺又ハ制限ヲ主張スルヲ得ス
執達吏ハ其正本ヲ携帶シ當事者ノ求アルキハ其資格ヲ證ス
ル爲メニ之ヲ示ス可シ

第五百四十五條 執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタル
キハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ
一分ヲ盡シタルキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取
ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ
債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムルノ權利ハ前項
ノ規定ニ因テ妨ケラル、ト無シ

第五百四十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ
債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及
ヒ筐匣ヲ開カシムルノ權利ヲ有ス

抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用井且警察上ノ
援助ヲ求ムルヲ得若シ兵力ヲ要スルキハ之ヲ執行裁判所
ニ申立ツ可シ

第五百四十七條 執達吏ハ執行行爲ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受ク
ルキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行行爲ヲ爲スニ際シ債務者
又ハ成長シタル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルキハ成丁者
二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハ
シム可シ

第五百四十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニ
ハ其求ニ依リ執達吏ノ記録ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存ス

ル書類ノ謄本ヲ付與スルコトヲ要ス

第五百四十九條 夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ祝祭日ニハ執行

裁判所ノ許可アルキニ限り執行行爲ヲ爲スコトヲ得

右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

第五百五十條 執達吏ハ各執行行爲ニ付キ調書ヲ作ル可シ

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 調書ヲ作りタル場所、年、月、日

第二 執行行爲ノ目的物及ヒ其重要ナル情況ノ略記

第三 執行ニ參カリタル各人ノ表示

第四 右各人ノ署名捺印及ヒ調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ

閱覽ノ爲メ示シタルコト及ヒ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シ

タルコトノ開示

第五 執達吏ノ署名捺印

第四號ニ揚ケタル要件ヲ具備スル能ハサルキハ其理由ヲ記載ス可シ

第五百五十一條 執行行爲ニ屬スル催告其他ノ通知ハ執達吏

口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサルキハ第四百十

條、第四百四十一條及ヒ第四百四十六條乃至第五百十條ノ規定ヲ

準用シテ其調書ノ謄本ヲ送達シ又特別ノ送達證ヲ作ラサル

キハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ送

達ヲ爲ス能ハサルキハ催告又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ

以テ調書ノ謄本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ

記載ス可シ

第五百五十二條 執行行爲ノ際債務者ニ爲スコキ送達及ヒ通

知ハ債務者ノ所在明カナラサルキ又ハ外國ニ在ルキハ之ヲ
必要トセス

第五百五十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行為
ノ處分又ハ其行為ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管
轄ニ屬ス

法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ
執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁
判所ヲ以テ執行裁所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得
第五百五十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵
守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之
ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百三十二條第二項ニ定メタル
命ヲ發スルノ權ヲ有ス

執達吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行
爲ヲ實施スルヲ拒ミタルキ又ハ執達吏ノ計算セシ手数料ニ
付キ異議アルキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スルノ權ヲ有ス

第五百五十五條 判決ニ因テ確定シタル請求ニ關スル債務者
ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ
右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クモ異議ヲ主張スルヲ
要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ
主張スルヲ得サルキニ限り之ヲ許ス
債務者カ數箇ノ異議ヲ有スルキハ同時ニ之ヲ主張スルヲ
要ス

第五百五十六條 前條ノ規定ハ第五百二十八條第二項及ヒ第
五百二十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際證明シ
タリト認メラレタル事實ノ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行

ヲ爲シ得ヘキモノヲ争ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ争フキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百三十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此カ爲メニ妨ケラル、ト無シ

第五百五十七條 強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因テ妨ケラル、ト無シ然レモ異議ノ爲メ主張シタル情況カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止ス可キヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命スルヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於

テハ裁判長之ヲ爲スヲ得

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲メニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルキハ債權者ノ申立ニ因リ強制執行ヲ續行ス

第五百五十八條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルヲ得

判決中前項ニ掲クル事項ニ限り職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百二十二條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十九條 第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ

主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨クルノ權利ヲ主張スルキハ訴テ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ

右訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起スキハ之ヲ共同訴訟人ト看做ス

右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス

強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百五十七條及ヒ第五百五十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲スヲ得

第五百六十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ

之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三 執行ヲ免カル、爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書

第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第五百六十一條 前條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可ク第二號ノ場合ニ

於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セサルキニ
限リ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ
第五百六十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルキハ
強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ
債務者ノ立會ヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續
人アラサルキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルキハ執行裁判
所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ臨時特別代
理人ヲ任ス可シ
第五百六十三條 強制執行ノ開始後ニ戸主タリシ債務者カ其
地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルキハ此變更ノ生セシ當時債務
者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス
第五百六十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債
務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ

之ヲ取立ツ可シ
強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルキハ其費
用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ
第五百六十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルキハ裁
判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ム可シ
第五百六十六條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シ
兵營及ヒ軍事用廳舎又ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キキ
ハ債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ管轄ノ軍事裁判所又ハ
所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス
差押物ハ債權者ノ委任シタル執達吏ニ之ヲ交付ス可シ
第五百六十七條 外國ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キ場合ニ於テ
其外國官廳カ本邦裁判所ニ法律上ノ共助ヲ爲ス可キキハ債
權者ノ申立ニ因リ第一審裁判所ハ之ヲ外國官廳ニ囑託ス可

シ
外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ得ヘキハ第一
審裁判所ハ之ヲ其領事ニ囑託ス可シ

第五百六十八條 強制執行ノ手續ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ
爲スヲ得ル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第五百六十九條 強制執行ハ左ノ諸件ニ付テモ亦之ヲ爲スヲ
得

第一 抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルヲ得ル裁判

第二 執行命令

第三 訴ノ提起後訴訟ノ全部又ハ一分ヲ解止スル爲メ受
訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ
於テ爲シタル和解

第四 第三百八十二條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シ

タル和解

第五 公證人カ其權限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作リタ
ル證書但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價
證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ
作リタル證書ニシテ直チニ強制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記
載シタルモノニ限ル

第五百七十條 前條ニ掲ケタル債務名義ニ因レル強制執行ニ
ハ第五百二十六條乃至第五百六十八條ノ規定ヲ準用ス但第
五百七十一條第五百七十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルキ
ハ此限ニ在ラス

第五百七十一條 執行命令ハ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ
債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限り執行文ヲ要スルモノトス
請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生シタル原因ニ基

クキニ限り之ヲ許ス

執行文付與ニ付テノ訴及ヒ請求ニ關スル異議ヲ主張シ又ハ執行文付與ノ際到來シタリト認メタル承繼ヲ爭フ訴ハ執行命令ヲ發シタル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノナルキハ管轄地方裁判所ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百七十二條 公證人ノ作りタル證書ノ執行力アル正本ハ

其證書ヲ保管スル公證人之ヲ付與ス

執行文付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ更ニ執行文付與ニ付テノ裁判ハ公證人職務上ノ住所ヲ有スル地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス
請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百五十五條第二項ニ規定シタル制限ニ從ハス

執行文付與ニ付テノ訴及ヒ請求ニ關スル異議ヲ主張シ又ハ執行文付與ノ際證明シタリト認メタル事實ノ到來ニ係リ此ニ因テ證書ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭フ訴ハ債務者カ本邦ニ於テ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所又ハ此裁判所ナキキハ第十七條ノ規定ニ從ヒ債務者ニ對シ訴ヲ起シ得ヘキ裁判所之ヲ管轄ス

第五百七十三條 本編ニ定メタル裁判籍ハ專屬ナリトス

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第五百七十四條 動産ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲ス
差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債權者ニ辨濟スル

爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲メニ必要ナルモノ、外ニ及ホスヲ得ス

差押フ可キ物品ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ルノ見込ナキハ強制執行ヲ爲スヲ得ス

第五百七十五條 第三者カ差押ヲ受ク可キ物品ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨クルヲ得ス然レモ第五百五十九條ノ規定ニ從ヒ訴テ以テ賣得金ニ付キ優先ノ辨濟ヲ請求スルノ權利ハ此カ爲メニ妨ケラル、ヲ無シ

此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル情況カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルハ裁判所ハ賣得金ノ供託ヲ命ス可シ但此事項ニ付テハ第五百五十七條及ヒ

第五百五十八條ノ規定ヲ準用ス

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第五百七十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動産ノ差押ハ執

達吏其物品ヲ占有シテ之ヲ爲ス

其物品ハ債權者ノ承諾アルキ又ハ其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困難アルキハ之ヲ債務者ノ保管ニ任ス可シ此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルキニ限り其効力ヲ生ス

執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタルヲ通知ス可シ

第五百七十七條 前條ノ規定ハ債權者又ハ物品ノ提出ヲ拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物品差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百七十八條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルヲ得然レモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一个月

内ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

蠶ハ其多分カ繭ヲ成造スル爲メ揚リ蠶ト爲リタル後ニ非サ

レハ之ヲ差押フルヲ得ス

第五百七十九條 差押ノ効力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ產出物ニモ當然及フモノトス

第五百八十條 左ニ掲クル物品ハ之ヲ差押フルヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具及ヒ厨具但此物品カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラサルキニ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一个月間ノ食料及ヒ薪炭

第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物品

第四 農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農產物

第五 文武ノ官吏、神職、僧侶、公立教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ管理シ又ハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物品並ニ身分相當ノ衣服

第六 文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立教育場教師ニ在テハ差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ時間ニ於テ職務上ノ收入又ハ恩給ノ差押ヲ受ケサル部分ニ相當スル金額

第七 藥舗ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク可カラサル器具及ヒ藥品

第八 勳章及ヒ名譽ノ證標

第九 實印其他職業ニ必要ナル印

第十 神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物品

第十一 系譜

第十二 債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル發明ニ關スル物品及ヒ債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル稿本
第十三 債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

然レモ債務者ノ承諾アルキハ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物品ヲ除クノ外之ヲ差押フルコトヲ得

第五百八十一條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルキハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スコシ若シ此カ爲メニ金錢ノ豫納ヲ要スルキハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名關係スルキハ其要求額ノ割合ニ從ヒ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシム可シ

第五百八十二條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債權者又ハ裁判所ノ特別委員ヲ要セスシテ以下數條ノ規定ニ從ヒ公ノ競

賣方法ヲ以テ其差押物ヲ賣却スコシ

第五百八十三條 競賣スコキ物品中ニ高價ノモノアルキハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシム可シ

第五百八十四條 差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡スコシ

執達吏カ金錢ヲ取立テタルキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カル、コトヲ債務者ニ許シタルキハ此限ニ在ラス

第五百八十五條 差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少クモ七日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス但差押債權者執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ競賣ヲ更ニ早く爲サシコトヲ合意シタルキ又ハ差押物ヲ永ク貯藏スルニ付キ不相應ノ費用若クハ其物品ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケシ爲メ競賣ヲ早く爲スコトノ必要ナルキハ此限ニ在ラス

第五百八十六條 競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スコト合意シタルキハ此限ニ在ラス
競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告ス但其公告ニハ競賣ス可キ物品ヲ表示ス可シ

第五百八十七條 最高價競買ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

競落物ノ引渡ハ代金ト引換ヘ之ヲ爲ス
最高價競買人競賣條件ニ定メタル期日又ハ其定ナキキハ競賣期日ノ終ル前ニ代金ノ支拂ヲ爲シテ物品ノ引渡ヲ求メサルキハ更ニ其物品ヲ競賣ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハルコト得ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キキハ不足ヲ擔任ス可シ其高キキハ剩餘ヲ

請求スルコトヲ得ス

第五百八十八條 競賣ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルキハ直チニ之ヲ止ム可シ

第五百八十九條 執達吏賣得金ヲ領收シタルキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カル、コト債務者ニ許シタルキハ此限ニ在ラス
第五百九十條 金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下ニ競落スルコト許サス其實價マテニ競買ヲ爲ス者ナキキハ執達吏ハ金銀ノ實價ニ達スル價額ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却スルコトヲ得

第五百九十一條 執達吏有價證券ヲ差押ヘタルキハ相場アルモノハ賣却日ノ相場ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却シ其相場ナキモノハ一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ競賣ス可シ

第五百九十二條 有價證券ノ記名ナルキハ執行裁判所ハ買主ノ氏名ニ書換ヲ爲サシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スノ權ヲ執達吏ニ與フルヲ得

第五百九十三條 無記名ノ證券ニシテ記名ニ換ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ流通ヲ止メタルモノナルキハ執行裁判所ハ其流通回復ヲ爲サシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スノ權ヲ執達吏ニ與フルヲ得

第五百九十四條 土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘタル果實ノ競賣ハ其成熟ノ後始メテ之ヲ爲スヲ許ス執達吏ハ競賣ノ爲メ其收穫ヲ爲サシムルノ權利アリ

差押ヘタル蠶ノ競賣ハ全ク繭ト爲リタル後始メテ之ヲ爲スヲ許ス

第五百九十五條 差押債權者執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要

求スル債權者又ハ債務者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ前數條ノ規定ニ依ラス他ノ方法又ハ他ノ場所ニ於テ差押物ノ賣却ヲ爲ス可キ旨又ハ執達吏ニ依ラス他ノ者ヲシテ競賣ヲ爲サシム可キ旨ヲ命スルヲ得

第五百九十六條 執達吏ハ既ニ差押ヘタル物品ニ付キ他ノ債權者ノ爲メ更ニ差押ノ手續ヲ爲スヲ得ス

執達吏ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ノ閱覽ヲ求メテ物品ノ照査ヲ爲シ未ダ差押ニ係ラサル物品アルキハ之ヲ差押ヘ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ヲ交付シ且總テノ差押物ヲ競賣ニ付ス可キヲ求ム可シ若シ差押フ可キ物品アラサルキハ照査調書ヲ作り執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

前項ノ求ニ因リ執行ニ關スル債權者ノ委任ハ第一ノ差押ヲ

爲シタル執達吏ニ法律上移轉ス

假差押ニ係ル物品ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第五百九十七條 前條ニ掲ケタル物品照査ノ手續ハ配當要求ノ効力ヲ生シ又第一ノ差押カ取消ト爲リタルキハ差押ノ効力ヲ生ス

第五百九十八條 適當ナル期間經過スルモ執達吏競賣ヲ爲サ、ルキハ執行力アル正本ヲ有スル各債權者ハ一定ノ期間内ニ競賣ヲ爲ス可キヲ催告シ其催告ノ効アラサルキハ相當ノ命令アラントテ執行裁判所ニ申請スルヲ得

第五百九十九條 民法ニ從ヒ配當ヲ要求シ得ヘキ債權者ハ執行力アル正本ニ因ラスシテ賣得金ノ配當ヲ要求スルヲ得
第六百條 前條ノ配當要求ハ其原因ヲ開示シ且假住所ヲ選定シ執達吏ニ之ヲ爲ス可シ

第六百一條 第五百九十六條第二項及ヒ第六百條ノ場合ニ於テ執達吏ハ配當要求ノアリタルヲ配當ニ參カル各債權者及ヒ債務者ニ通知ス可シ

執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルキハ債務者ハ執達吏ノ通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヲ執達吏ニ申立ツ可シ
債務者カ認諾セサルヲ執達吏ヨリ通知アリタルキハ債權者ハ三日ノ期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第六百二條 配當ノ要求ハ競賣期日ノ終リニ至ルマテ之ヲ爲スヲ得

第六百三條 賣得金ヲ以テ各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テ債權者間ニ配當ノ協議調ハサルキハ其賣得金

ヲ供託ス可シ

數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ヘタルキ亦同シ
右ノ場合ニ於テ執達吏ハ其情況ヲ執行裁判所ニ届出ツ可ク
其届書ニハ執行手續ニ關スル書類ヲ添附ス可シ

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行

第六百四條 第三者(第三債務者)ニ對スル債務者ノ債權ニシテ
金錢ノ支拂又ハ他ノ有體物若クハ有價證券ノ引渡若クハ給
付ヲ目的トスルモノ、強制執行ハ執行裁判所ノ差押命令ヲ
以テ之ヲ爲ス

第六百五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有ス
ル地ノ區裁判所若シ此區裁判所ナキハ第十七條ノ規定ニ
從ヒ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有ス
第六百六條 債務者ハ差押命令ノ申請ニ差押フ可キ債權ノ種

類及ヒ數額ヲ開示ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス可キヲ得

第六百七條 差押命令ハ豫メ第三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ
經スシテ之ヲ發ス

第六百八條 金錢ノ債權ヲ差押フ可キハ裁判所ハ第三債務
者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲ス可キヲ禁シ又債務者ニ對シ債權
ノ處分殊ニ其取立ヲ爲ス可カラサルヲ命ス可シ
差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達シ
又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知ス可シ
差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト
看做ス

第六百九條 抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債
務者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入スル

ノ權利アリ

此記入ノ申請ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ其申請ハ差押命令ノ申請ト之ヲ併合スルヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動産ノ所有者(第三債務者)ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ手續ヲ爲ス可シ

第六百十條 差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押債權者ノ選擇ニ從ヒ代位ノ手續ヲ要セスシテ之ヲ取立ツル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ券面額ニテ差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令アラントテ申請スルヲ得

右命令ノ送達ニ付テハ第六百八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第六百十一條 支拂ニ換ヘ券面額ニテ債權ヲ轉付スルノ命令アル場合ニ於テハ其債權ノ存スル限リハ第六百八條第二項ノ手續ヲ爲スニ因リ債務者ハ債權ノ辨濟ヲ爲シタルモノト

看做ス

第六百十二條 取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額ニ及フモノトス但執行裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ差押債權者ヲ審訊シテ差押額ヲ其債權者ノ要求額マテニ制限シ其超過スル額ノ處分殊ニ取立ヲ爲スヲ許スヲ得其制限シタル部分ニ限リ他ノ債權者ハ配當要求ヲ爲スヲ得ス

右許可ハ第三債務者及ヒ債權者ニ通知ス可シ

第六百十三條 爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルヲ得ル證券ニ因レル債權ノ差押ハ執達吏其證券ヲ占有シテ之ヲ爲ス

第六百十四條 俸給又ハ此ニ類スル繼續收入ノ債權ノ差押ハ差押後到來スル期限ニ收入ス可キ金額ニ及フモノトス

第六百十五條 職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官兼任又ハ増俸ニ因ル收入ニモ亦及フモノトス

第六百十六條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書ヲ差押債權者ニ引渡スノ義務アリ債權者ハ差押命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債務者ヨリ取上ケシムルヲ得

第六百十七條 第五百十五條第二項ニ從ヒ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カル、トテ許ス可キキハ差押ヘタル金錢債權ニ付テハ取立ノ命令ノミヲ爲ス可キモノトス但此命令ハ第三債務者ヲシテ債務額ヲ供託セシムルノ効力ノミヲ有ス

第六百十八條 債權者取立ヲ爲シタルキハ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツ可シ

第六百十九條 第三債務者ハ差押債權者ノ求ニ因リ差押命令ノ送達ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者ニ書面ヲ以テ左ノ陳述ヲ爲ス可キモノトス

第一 債權ノ認諾ノ有無及ヒ其限度並ニ支拂ヲ爲ス意思ノ有無及ヒ其限度

第二 債務ニ付キ他ノ者ヨリノ請求ノ有無及ヒ其種類

第三 債務カ既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラレタルトノ有無及ヒ其請求ノ種類
右ノ陳述ヲ求ムルノ催告ハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ第三債務者陳述ヲ怠リタルキハ此ニ因テ生スル損害ニ付キ其責ニ任ス

第六百二十條 債權者カ命令ノ旨趣ニ基キ第三債務者ニ對シテ訴ヲ起スニ至リタルキハ一般ノ規定ニ從ヒ管轄ヲ有スル裁判所ニ其訴ヲ起シ且債務者内國ニ在テ住所ノ知レタルキハ其訴訟ヲ之ニ告知ス可シ

第六百二十一條 債權者カ取立ヲ爲ス可キ債權ノ行用ヲ怠リ

タルキハ此カ爲メ債務者ニ生シタル損害ノ責ニ任メ
第六百二十二條 債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ取得シタル
權利ヲ拋棄スルコトヲ得但此カ爲メ其請求ヲ害セラル、コト無
シ
此拋棄ハ裁判所ニ届書ヲ差出シテ之ヲ爲ス但其謄本ハ第三
債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達ス可シ
第六百二十三條 差押ヘタル債權カ條件附若クハ有期ナルキ
又ハ反對給付ニ繋リ若クハ他ノ理由アリテ其取立ノ困難ナ
ルキハ裁判所ハ申立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命ス
ルコトヲ得
債務者内國ニ在テ住所ノ知レタルキハ其申立ヲ許ス決定前
ニ之ヲ審訊ス可シ
第六百二十四條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ對スル強制

執行ハ以下數條ノ規定ヲ斟酌シテ第六百八條乃至第六百二
十二條ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス
第六百二十五條 有體動産ノ請求ノ差押ニ付テハ其動産ヲ債
權者ノ委任シタル執達吏ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス
第六百二十六條 不動産ノ請求ノ差押ニ付テハ債權者ノ申立
ニ因リ其不動産ヲ不動産所在地ノ區裁判所ヨリ命シタル管
守人ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
引渡シタル不動産ニ付テノ強制執行ハ不動産ニ對スル強制
執行ニ付テノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス
第六百二十七條 第六百二十四條ニ掲ケタル請求ニ付テハ支
拂ニ換ヘ轉付スルノ命令ヲ爲スコトヲ得ス
第六百二十八條 左ニ掲クル債權ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 法律上ノ養料
 第二 債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者ノ慈惠ニ因リ受クル繼續ノ收入但債務者及ヒ其家族ノ生活ノ爲メ必要ナルモノニ限ル
 第三 下士兵卒ノ給料並ニ恩給及ヒ其遺族ノ扶助料
 第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル軍人軍屬ノ職務上ノ收入
 第五 文武ノ官吏神職僧侶及ヒ公立教育場教師ノ職務上ノ收入恩給及ヒ其遺族ノ扶助料
 第六 職工又ハ雇人カ其勞力又ハ役務ノ爲メニ受クル報酬
 第一號第五號第六號ノ場合ニ於テ職務上ノ收入恩給其他ノ收入カ一个年間ニ三百圓ヲ超過スルキハ其超過額ノ半額ヲ

差押フルヲ得

第六百二十九條 數名ノ債權者ノ爲メ同時ニ爲ス可キ債權ノ差押ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス
 第六百三十條 執行力アル正本ヲ有スル債權者及ヒ民法ニ從ヒ配當ノ要求ヲ爲シ得ヘキ債權者ハ差押債權者カ取立ヲ爲シ其旨ヲ執行裁判所ニ届出ツルマテ又ハ執達吏カ賣得金ヲ領收スルマテ配當ヲ要求スルヲ得但執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ニ付テハ第六百條第二項ノ規定ヲ適用ス
 支拂ニ換ヘテノ轉付ノ命令アリタル後ハ配當ノ要求ヲ爲スヲ得ス
 右配當要求ハ職權ヲ以テ之ヲ第三債務者債務者及ヒ差押債權者ニ送達シ又第一差押ノ取消ト爲リタルキハ執行力アル

正本ニ因リ要求シタル債權者ノ爲メ順次差押ノ効力ヲ生ス
第六百三十一條 金錢ノ債權ニ付キ配當要求ノ送達ヲ受ケタ
ル第三債務者ハ債務額ヲ供託スルノ權利アリ
第三債務者ハ配當ニ參カル或ル債權者ノ求ニ因リ債務額ヲ
供託スルノ義務アリ
第三債務者債務額ヲ供託シタルキハ其情況ヲ裁判所ニ届出
ツ可シ
第六百三十二條 請求カ不動産ニ關スルキハ第三債務者ハ其
不動産所在地ノ區裁判所カ差押債權者又ハ第三債務者ノ申
立ニ因リ命シタル管守人ニ情況ヲ開示シ且送達セラレタル
命令ヲ添へ其不動産ヲ引渡スノ權利ヲ有シ又ハ差押債權者
ノ求ニ因リ之ヲ引渡スノ義務アリ
第六百三十三條 第三債務者カ取立手續ニ對シ義務ヲ履行セ

サルキハ差押債權者ハ訴ヲ以テ之ヲ履行セシムルヲ得
執行力アル正本ヲ有スル各債權者ハ共同訴訟人トシテ原告
ニ加ハルノ權利アリ
訴ヲ受ケタル第三債務者ハ口頭辯論ノ第一期日マテニ原告
ニ加ハラサル債權者ヲ共同訴訟人トシテ呼出アラント申
立ツルヲ得
右ノ場合ニ於ケル裁判ハ呼出ヲ受ケタル債權者ニ利害ヲ及
ホスノ効力アリ
第六百三十四條 差押債權者取立手續ヲ怠リタルキハ執行力
アル正本ニ因リ要求シタル各債權者ハ一定ノ期間内ニ取立
ヲ爲ス可キヲ催告シ其催告ノ効アラサルキハ執行裁判所
ノ許可ヲ得テ自ラ取立ヲ爲スヲ得
第六百三十五條 不動産ヲ目的トセス又前數條ニ掲ケタル以

外ノ財産權ニ對スル強制執行ニ付テハ本款ノ規定ヲ準用ス
若シ第三債務者ナキハ差押ハ債務者ニ權利ノ處分ヲ禁ス
ル命令ヲ送達シタル日時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス
右ノ場合ニ於テハ裁判所ハ特別ノ處分殊ニ其權利ノ管理若
クハ讓渡ヲ命スルヲ得

第四款 配當手續

第六百三十六條 配當手續ハ動産ニ對スル強制執行ニ際シ競
賣期日又ハ金錢差押ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ債權者間ノ
協議調ハサル爲メ金額ヲ供託シタルキ之ヲ爲ス

第六百三十七條 裁判所ハ情况届書ニ基キ七日ノ期間内ニ元
金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ各債
權者ニ催告ス可シ

第六百三十八條 前條ノ期間滿了後裁判所ハ配當表ヲ作ル可

シ
右期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ配當表ヲ作ルニ際シ配
當要求並ニ届書ノ旨趣及ヒ其憑據書類ニ依リ之ヲ計算ス但
後ニ債權額ヲ補充スルヲ許サス

第六百三十九條 裁判所ハ配當表ニ關スル陳述及ヒ配當實施
ノ爲メ期日ヲ指定シ其期日ニハ各債權者及ヒ債務者ヲ呼出
ス可シ但債務者ノ所在明カナラサルキ又ハ外國ニ在ルキハ
呼出ヲ爲スヲ要セス

配當表ハ各債權者及ヒ債務者ニ閱覽セシムル爲メ遅クモ期
日ノ三日前ニ裁判所書記課ニ之ヲ備置ク可シ

第六百四十條 期日ニ於テ異議ノ申立ナキハ配當表ニ從ヒ
其配當ヲ實施ス可シ

停止條件附ノ債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託シ民法ニ從ヒ條

件ノ成否ニ依リ後ニ之ヲ支拂ヒ又ハ更ニ配當ス可シ
第六百一條第三項ノ場合又ハ假差押ノ場合ニ於テ未タ確定
セサル債權其他異議アル債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可
シ

配當實施ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六百四十一條 異議ノ申立アルキハ他ノ債權者ハ直チニ陳
述ヲ爲ス可シ若シ異議ヲ正當ナリト認ムルキ又ハ他ノ方法
ニ於テ合意スルキハ此ニ從ヒ配當表ヲ更正シテ配當ヲ實施
ス可シ

異議ノ完結セサルキハ異議ナキ部分ニ限り配當ヲ實施ス可
シ

第六百四十二條 期日ニ出頭セサル債權者ハ配當表ノ實施ニ
同意シタルモノト看做ス

若シ期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨリ申立テタル
異議ニ關係ヲ有スルキハ其債權者ハ異議ヲ正當ナリト認メ
サルモノト看做ス

第六百四十三條 期日ニ於テ異議ノ完結セサルキハ異議ヲ申
立テタル債權者ハ他ノ債權者ニ對シ訴ヲ起シタルトテ期日
ヨリ七日ノ期間内ニ裁判所ニ證明ス可シ若シ其期間ヲ徒過
シタル後ハ裁判所ハ異議ニ拘ハラヌ配當ノ實施ヲ命ス可シ

第六百四十四條 異議ヲ申立テタル債權者前條ノ期間ヲ怠リ
タルキト雖モ配當表ニ從ヒ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シ訴
ヲ以テ優先權ヲ主張スルノ權利ハ配當實施ノ爲メ妨ケラル
、ト無シ

第六百四十五條 異議ヲ申立テタル債權者ノ訴ニ付テハ配當
裁判所之ヲ管轄ス然レモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサ

ルキハ其配當裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス若シ數箇ノ訴ノ提起アリタル場合ニ於テ一ノ訴ヲ地方裁判所カ管轄スルキハ其他ノ訴ヲモ亦之ヲ管轄ス但各債權者總テノ異議ニ付キ配當裁判所ノ裁判ヲ受ク可キヲ合意シタルキハ此限ニ在ラス

第六百四十六條 異議ニ付キ裁判ヲ爲ス判決ニハ配當額ノ係争部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數額ヲ以テ支拂フ可キヤヲ定ム可シ若シ之ヲ定ムルヲ適當トセサルキハ判決ニ於テ新ナル配當表ノ調製及ヒ他ノ配當手續ヲ命ス可シ

第六百四十七條 異議ヲ申立テタル債權者カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルキハ異議ヲ取下ケタルモノト看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲ス可シ

第六百四十八條 前二條ノ判決確定ノ證明アルキハ配當裁判

所ハ其判決ニ基キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命ス

第六百四十九條 裁判所ハ配當表ニ因リ左ノ手續ヲ爲シ配當ヲ實施ス可シ

債權全部ノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ其所持スル執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ
債權一分ノミノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ニ配當額ヲ記入シテ返還シ且配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ右債權者ヨリ金額ヲ證記シタル受取書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ
期日ニ出頭セサル債權者ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可シ
右ノ手續ヲ爲シタルキハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニス可シ

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第六百五十條 不動産ニ對スル強制執行ハ左ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス

第一 強制競賣

第二 強制管理

債權者ハ自己ノ選擇ニ依リ一箇ノ方法ヲ以テ又ハ二箇ノ方法ヲ併セテ執行セシムルヲ得

強制管理ハ假差押ノ執行ノ爲メニモ亦之ヲ爲ス

第六百五十一條 不動産ニ對スル強制執行ニ付テハ其不動産所在地ノ區裁判所執行裁判所トシテ之ヲ管轄ス若シ其不動産數箇ノ區裁判所ノ管轄區内ニ散在スルキハ第二十六條ノ規定ヲ適用ス

強制執行ハ申立ニ因リ裁判所之ヲ爲ス

第六百五十二條

強制競賣及ヒ強制管理ノ手續ニ於テ利害關係人ニ對シ送達ヲ爲スキ利害關係人無能力者ニシテ代理人又ハ其住所カ裁判所ニ知レサル場合ニ於テハ後見人取扱官署ニ送達ヲ爲シ又無形人ニ付キ同一ノ場合ニ於テハ其管轄廳ニ送達ヲ爲スヲ以テ足ル

利害關係人ノ住所若クハ其代理人ノ住所ヲ知ルヲ得ス又ハ其死亡シタルヲ顯ハル、キハ執行裁判所ハ利害關係人又ハ其承繼人ノ爲メニ送達ヲ受領スル臨時代理人ヲ任シ之ニ送達ヲ爲ス可シ但後見人取扱官署若クハ管轄廳ニ送達ヲ爲スヲ得サルキニ限ル

前二項ノ規定ハ開始決定ヲ債務者ニ送達スル場合ニ於テハ之ヲ適用セス又抗告審ニ於テハ競落ヲ許ス決定ヲ送達スル場合ニ限り之ヲ適用ス

第六百五十三條 前條第二項ノ規定ニ從ヒ任命シタル代理人ハ利害關係人ヲ探知シ及ヒ之ニ通知ヲ爲スノ義務アリ又其代理人ハ利害關係人ヨリ立替金ノ辨濟ヲ受クルノ外此行爲ニ付キ裁判所ノ定ム可キ報酬ヲ受クルノ權利アリ

第二款 強制競賣

第六百五十四條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 債權者、債務者及ヒ裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

第三 競賣ノ原因タル一定ノ債權及ヒ其債權ニ付キ存スル執行シ得ヘキ一定ノ債務名義

第六百五十五條 申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添付ス可シ

第一 登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記シタル不動産ニ付テハ登記判事ノ認證書

第二 登記簿ニ登記アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所有タルヲ證ス可キ證書

第三 地所ニ付テハ國郡市町村字番地地目反別若クハ坪數土地臺帳ニ登錄シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納ム可キ一个年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村字番地、構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ム可キ一个年ノ公課ヲ證ス可キ證書

第五 地所、建物ニ付キ賃貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃ヲ證ス可キ證書

第二號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債權者公簿ヲ主管スル官廳ニ其證明書ヲ求ムルヲ得

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ證明スル能ハサルキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁判所ニ求ムルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ強制管理ノ爲メ既ニ不動産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其執行記録ニ第一號乃至第五號ノ要件記載アルキハ之ヲ援用スルコトヲ得

第六百五十六條 競賣手續ノ開始決定ニハ同時ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ差押フルコトヲ宣言ス可シ
差押ハ不動産ニ屬スル動産ヲ包含ス但次期ノ收穫マテ農事ヲ續行スルニ必要ナル農産物外ノ農産物及ヒ地所建物ノ賃金ハ此限ニ在ラス
差押ハ債務者カ不動産ノ利用及ヒ管理ヲ爲スコトヲ妨ケス
差押ハ其決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送

達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百五十七條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ競賣手續ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ因リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル競賣手續取消ト爲リタルキハ第六百六十一條第一項ノ規定ヲ害セサル限りハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス
假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セ

第六百五十八條 配當要求ハ其原因ヲ開示シ且假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
右要求ハ競落期日ノ終リニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百五十九條 執行裁判所ハ前二條ノ要求アリタルヲ利害關係人ニ通知ス可シ

執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者アルキハ債務者ハ右通知アリタルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヲ裁判所ニ申出ツ可シ

債務者カ認諾セサルヲ裁判所ヨリ通知アリタルキハ債權者ハ三日ノ期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第六百六十條 左ニ掲クル者ヲ強制競賣ニ於テノ利害關係人トス

- 第一 差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者
- 第二 債務者

第三 登記簿ニ記入アル不動産上權利者

第四 不動産上權利者トシテ其債權ヲ證明シ執行記録ニ備フ可キ届出ヲ爲シタル者

第六百六十一條 差押債權者ノ債權ニ先タツ債權ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辨濟スルニ足ルノ見込アルニ非サレハ賣却ヲ爲ス可シ得ス

不動産ハ賣却ニ因リ登記簿ニ記入ヲ要スル總テノ不動産上ノ負擔ヲ免カル、モノトス但競落人其負擔ヲ引受ケタルキハ此限ニ在ラス

登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産ノ負擔ハ競落人之ヲ引受クルモノトス

第六百六十二條 權利ヲ取得スル第三者其取得ノ際差押又ハ

競賣ノ申立アリタルヲ知リタルキハ差押ノ効力ニ對シ其善意ナリシヲ主張スルヲ得ス
若シ不動産カ差押ノ原因タル債權ノ爲メ不動産上ノ義務ヲ負擔スルキハ差押後所有ノ移轉シタル場合ニ限り新所有者其取得ノ際差押又ハ競賣ノ申立アリタルヲ知ラサルキト雖モ競賣手續ヲ續行ス可シ
競賣申立ノ取下ニ因テ差押ハ消滅ス

第六百六十三條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定ヲ爲スノ際職權ヲ以テ競賣ノ申立アリタルヲ登記簿ニ記入ス可キ旨ヲ登記判事ニ囑託ス可シ
登記判事ハ前項ノ囑託ニ從ヒ記入ヲ爲ス可シ
第六百六十四條 登記判事ハ前條ニ掲ケタル記入ヲ爲シタル後登記簿ノ謄本ヲ裁判所ニ送付シ不動産上權利者ヨリ差出

シタル證書アルキハ其抄本ヲモ送付ス可シ
第六百六十五條 豫メ知ルニ於テハ手續ノ開始ヲ妨ク可キ事實カ登記判事ノ通知ニ依リ顯ハル、キハ裁判所ハ其情況ニ

因リ直チニ手續ヲ取消シ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル期間内ニ其障礙ノ消滅シタルヲ證明ス可キヲ債權者ニ命ス可シ其期間内ニ此證明ヲ爲サルキハ期間ノ滿了後職權ヲ以テ手續ヲ取消ス可シ

第六百六十六條 裁判所ハ競賣開始ノ決定ヲ爲シタルキハ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官署ニ通知シ其不動産ニ對スル債權ノ有無及ヒ程度ヲ申出ツ可キヲ期間ヲ定メ催告ス可シ
第六百六十七條 裁判所ハ登記判事及ヒ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官署ヨリ通知ヲ受ケタル後鑑定人ヲシテ不動産ノ評價ヲ爲サシメ其評價額ヲ以テ最低競賣價額トス

第六百六十八條 裁判所ハ前條ノ最低競賣價額ヲ以テ差押債權者ノ債權ニ先ダツ不動産上ノ總テノ負擔及ヒ手續ノ費用ヲ辨濟シテ剩餘アルノ見込ナシトスルキハ差押債權者ニ其旨ヲ通知ス可シ

右通知ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者負擔及ヒ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル可キ價額ヲ定メ且其價額ニ應スル競買人ナキ場合ニ於テハ自ラ其價額ヲ以テ買受ク可キ旨ヲ申立テ十分ナル保證ヲ立テサルキハ競賣手續ヲ取消ス可シ

第六百六十九條 裁判所ハ前條第一項ノ債權及ヒ費用ヲ辨濟シ剩餘ヲ得ルノ見込アルキハ職權ヲ以テ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メ之ヲ公告ス

第六百七十條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

- 第一 不動産ノ表示
 - 第二 租稅其他ノ公課
 - 第三 賃貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃
 - 第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨
 - 第五 競賣期日ノ場所、日時及ヒ競賣ヲ爲ス可キ執達吏ノ氏名並ニ住所
 - 第六 最低競賣價額
 - 第七 競落期日及ヒ場所
 - 第八 執行記録ヲ閱覽シ得ヘキ場所
 - 第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨
 - 第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨
- 第六百七十一條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少クモ十四日ノ後

タル可シ

此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム

第六百七十二條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ過クルコトヲ得ス

此期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク
第六百七十三條 競賣期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ揭示シテ之ヲ爲ス

第一 裁判所ノ揭示板

第二 不動産所在地ノ市、町、村ノ揭示板

其他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得

第六百七十四條 最低競賣價額ヲ除クノ外本款ニ掲ケタル賣

却條件ノ變更ハ利害關係人ノ合意アルキニ限り之ヲ許ス但此合意ハ競賣期日ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第六百七十五條 競賣期日ヲ開キタル後執達吏ハ執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シ又特別ノ賣却條件アルキハ之ヲ告知シ且競買價額申出ヲ催告ス可シ

第六百七十六條 利害關係人カ或ル競買人ヨリ保證ヲ立テシメシコトヲ申立ツルキハ其競買人カ保證トシテ競買價額十分ノ一ニ當ル金額ヲ現金又ハ有價證券ヲ以テ直チニ執達吏ニ預クルニ非サレハ其競買ヲ許サス
右申立ハ競買價額ノ申出アリタル後直チニ之ヲ述ブルコトヲ要ス其申立ハ同一ナル競買人ノ其後ノ競買ニ付テモ亦効力アリ

第六百七十七條 競買ヲ許サレタル各競買人ハ更ニ高價ノ競

買ノ許アルマテ其申立テタル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス

競賣ハ競買價額ヲ申出ツ可キノ催告後滿一時間ヲ過クルニ非サレハ之ヲ終局スルヲ得ス

第六百七十八條 執達吏ハ最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタル後競賣ノ終局ヲ告知ス可シ

他ノ各競買人ハ右ノ告知ニ因リ其競買ノ責務ヲ免カレ且預ケタル保證アルキハ即時ニ其返還ヲ求ムルノ權利アリ

第六百七十九條 競賣ニ付キ作ル可キ調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

- 第一 不動産ノ表示
- 第二 差押債權者ノ表示
- 第三 執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シタルヲ又特別賣却條

件アルキハ之ヲ告知シタルヲ

第四 競買價額ノ申出ヲ催告シタル日時

第五 總テノ競買價額並ニ其申出人ノ氏名住所又ハ許ス可キ競買ノ申出ナキヲ

第六 競賣ノ終局ヲ告知シタル日時

第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保證ヲ立テタルヲ又ハ申立アルモ保證ヲ立テサル爲メ其競買ヲ許サ、ルヲ

第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタルヲ最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調書ニ署名捺印ス可シ若シ此等ノ者調書ノ作成前ニ退席シタルキハ其旨ヲ

附記ス可シ
競買ノ保證ノ爲メ預リタル金錢又ハ有價證券ヲ返還シタルキハ執達吏ハ受取證ヲ取り之ヲ調書ニ添附ス可シ

第六百八十條 執達吏ハ調書及ヒ總テ競買ノ保證ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價證券ニシテ返還セサルモノハ三日内ニ裁判所書記ニ之ヲ渡ス可シ

第六百八十一條 最高價競買人執行裁判所ノ所在地ニ住セサルキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ若シ之ヲ怠リタルキハ第四百四十四條第三項ノ規定ヲ準用ス
住所ノ選定ハ執達吏ニ口述シ其調書ヲ作ラシメテ之ヲ爲ス
ヲ得

第六百八十二條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキキハ第六百六十一條第一項ノ規定ヲ害セサル限りハ裁判所ハ其意見ヲ以テ最低競賣價額ヲ相當ニ低減シ新競賣期日ヲ定ム可シ若シ其期日ニ於テ仍ホ許ス可キ競買價額ノ申出

ナキキ亦同シ

新競賣期日ハ少クモ十四日ノ後タル可シ

第六百八十三條 裁判所ハ競落期日ニ出頭シタル利害關係人

ニ競落ノ許可ニ付キ陳述ヲ爲サシム可シ

競落ノ許可ニ付テノ異議ハ期日マテニ之ヲ申立ツ可シ既ニ

申立テタル異議ニ對スル陳述ニ付テモ亦同シ

第六百八十四條 競落ノ許可ニ付テノ異議ハ左ノ理由ニ基ク

ヲ要ス

第一 強制執行ヲ許ス可カラサルヲ又ハ執行ヲ續行ス可カラサルヲ

第二 最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スルノ能力ナキヲ

第三 法律上ノ賣却條件ニ牴觸シテ競買ヲ爲シタルヲ又

ハ總テノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條
件ヲ變更シタルヲ
第四 競賣期日ノ公告ニ第六百七十條ニ掲ケタル要件ノ
記載ナキヲ
第五 競賣期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ因リ之
ヲ爲サ、ルヲ
第六 第六百七十一條ニ規定シタル期間ヲ存セサリシヲ
第七 第六百七十七條第二項及ヒ第六百七十八條第一項
ノ規定ニ違背シタルヲ
第八 第六百七十六條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリ
ト呼上ケタルヲ
第六百八十五條 異議ハ他ノ利害關係人ノ權利ニ關スル理由
ニ基テハ之ヲ許サス

第六百八十六條 裁判所ハ異議ノ申立ヲ正當トスルキハ競落
ヲ許サス
第六百八十四條第一號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ一アル
キハ職權ヲ以テモ競落ヲ許サス但第一號ノ場合ニ於テハ競
賣シタル不動産カ讓渡スヲ得サルモノナルキ又ハ競賣手
續ノ停止ヲ爲シタルキニ限り第二號ノ場合ニ於テハ能力若
クハ資格ノ欠缺カ除去セラレタルキニ限り第三號ノ場合ニ
於テハ利害關係人手續ノ續行ニ付キ承認セサルキニ限ル
第六百八十七條 數箇ノ不動産ヲ競賣ニ付シタル場合ニ於テ
或ル不動産ノ賣得金ヲ以テ各債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制
執行ノ費用ヲ償フニ足ル可キキハ他ノ不動産ニ付テハ競落
ヲ許サス
此場合ニ於テ債務者ハ其不動産中賣却ス可キモノヲ指定ス

ルヲ得

第六百八十八條 第六百八十四條及ヒ第六百八十六條ノ規定ニ從ヒ全ク競落ヲ許サ、ル場合ニ於テ更ニ競賣ヲ許ス可キキハ職權ヲ以テ新競賣期日ヲ定ム可シ
新競賣期日ハ少クモ十四日ノ後タル可シ

第六百八十九條 前條ノ規定ニ從ヒ新競賣期日ヲ定ムル場合ヲ除クノ外競落ヲ許シ又ハ許サ、ル決定ノ言渡ヲ爲ス可シ
右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

競落期日ノ調書ニ付テハ第三百三十條乃至第三百三十三條及ヒ第三百三十五條ノ規定ヲ準用ス

第六百九十條 競賣期日ト競落期日トノ間ニ天災其他ノ事變ニ因リ不動産カ著シク毀損シタルキハ最高價競買人タルノ呼上ヲ受ケタル者ハ其競買ヲ取消スノ權利アリ其毀損ノ著

シキヤ否ハ裁判所情況ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第六百九十一條 競落ヲ許ス決定ニハ競賣ヲ爲シタル不動産競落人及ヒ競落ヲ許シタル競買價額ヲ掲ケ又特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルキハ其條件ヲモ掲ク可シ
右決定ハ之ヲ言渡スノ外尙ホ裁判所ノ掲示板ニ揭示シテ公告ス可シ

第六百九十二條 利害關係人ハ競落ノ許否ニ關スル決定ニ因リ損失ヲ被ムル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スヲ得

競落ヲ許ス可キ理由ナキヲ又ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許ス可キヲ主張スル競落人又ハ競落ヲ求メ之ヲ許ス可キヲ主張スル競買人モ又即時抗告ヲ爲スヲ得
右抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス

第六百九十三條 競落ヲ許サ、ル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲クル總テノ不許ノ原因ナキトテ理由トスルキニ限り之ヲ爲ストテ得

競落ヲ許シタル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲クル競落ノ許可ニ對スル異議ノ原因ノ一テ理由トスルキ又ハ競落決定カ競落期日ノ調書ノ旨趣ニ牴觸シタルトテ理由トスルキニ限り之ヲ爲ストテ得

取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴ノ要件ヲ理由トスル抗告ハ前二項ノ規定ニ依リ妨ケラル、ト無シ前條ニ規定シタル場合ヲ理由トスル抗告ニ付テモ亦同シ

第六百九十四條 抗告裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定ム可シ

一ノ決定ニ關スル數箇ノ抗告ハ互ニ之ヲ併合ス可シ

第六百八十五條及ヒ第六百八十六條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用ス

第六百九十五條 執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所之ヲ裁判所ノ掲示板ニ揭示シテ公告ス可シ

第六百九十六條 競落ヲ許サ、ル決定確定シタルキハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カル

第六百九十七條 第六百九十條ノ場合ニ於テ競賣取消ノ爲メ競落ヲ許サ、ルキハ第六百六十七條乃至第六百六十九條ノ規定ヲ準用ス

第六百九十八條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因リ不動産ノ所有權ヲ取得スルモノトス

第六百九十九條 競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非サ

レハ不動産ノ引渡ヲ求ムルヲ得ス
競落人若クハ債權者競落ヲ許ス決定アリタル後引渡アルマ
テ管理人ナシテ不動産ヲ管理セシメントナ申立テタルハ
裁判所ハ之ヲ命ス可シ
債務者カ引渡ヲ拒ミタルハ競落人若クハ債權者ノ申立ニ
因リ裁判所ハ執達吏ヲシテ債務者ノ占有ヲ解キ引渡ヲ爲サ
シム可シ

第七百條 競落人カ代金支拂期日ニ其義務ヲ完全ニ履行セサ
ルハ裁判所ハ職權ヲ以テ不動産ノ再競賣ヲ命ス可シ
最初ノ競賣ノ爲メニ定メタル最低競賣價額其他賣却條件ハ
再競賣ノ手續ニモ亦之ヲ適用ス
再競賣期日ハ少クモ十四日ノ後タル可シ
競落人カ再競賣期日ノ三日前茅テニ買入代金及ヒ手續ノ費

用ヲ支拂ヒタルハ再競賣手續ヲ取消ス可シ
再競賣ヲ爲スハ前ノ競落人ハ競買ニ加ハルヲ許サス且
再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キハ不足ノ額及
ヒ手續ノ費用ヲ負擔シ其高キハ剩餘ノ額ヲ請求スルヲ
得ス

第七百一條 共有物持分ノ強制競賣ニ付テハ債權者ノ債權ノ
爲ノ債務者ノ持分ニ付キ強制競賣ノ申立アリタルヲ登記
簿ニ記入ス但他ノ共有者ニハ其差押ヲ通知ス可シ
最低競賣價額ハ共有物全部ノ評價額ニ基キ債務者ノ持分ニ
付キ之ヲ定ム可シ

第七百二條 競賣申立カ競落ヲ許スヲクシテ完結シタルハ
ハ裁判所ハ差押記入ノ抹殺ヲ登記判事ニ囑託ス可シ

第七百三條 競落ヲ許ス決定確定スルハ賣却代金ヲ以テ差

押債權者ニ辨濟シ又其代金カ配當ニ參カル各債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テハ民法、商法及ヒ特別法ニ從ヒ之ヲ配當ス可シ

第七百四條 各債權者ハ競落期日マテニ其債權ノ元金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ計算書ヲ差出ス可シ

前項ノ規定ニ從ハサル債權者ニ付テハ第六百三十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第七百五條 代金ノ支拂及ヒ配當ハ競落ヲ許ス決定ノ確定後ニ裁判所カ職權ヲ以テ定ムル期日ニ於テ之ヲ爲ス

此期日ニハ利害關係人、執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者及ヒ競落人ヲ呼出ス可シ

第七百六條 期日ニ於テハ先ツ配當ス可キ不動産ノ賣却代金ノ幾許ナルヤヲ定ム可シ

左ノモノヲ賣却代金トス

第一 代金

第二 不動産カ果實其他金錢ニ見積ルヲ得ヘキ利益ヲ生スル場合ニ於テハ競落決定言渡ヨリ代金支拂マテノ利息

代金支拂ハ裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
最高競買價額ノ保證ノ爲メ預リタル金額ハ代金ニ之ヲ算入ス

第七百七條 裁判所ハ出頭シタル利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ヲ訊問シテ配當表ヲ確定ス可シ

第七百八條 配當表ニハ賣却代金、各債權者ノ債權ノ元金、利息、費用及ヒ配當ノ順位並ニ配當ノ割合ヲ記載ス可シ

若シ出頭シタル總テノ利害關係人及ヒ執行力アル正本ニ因
ラスシテ配當ヲ要求スル債權者一致シタルキハ其一致ニ基
キ配當表ヲ作ル可シ

第七百九條 配當表ニ對スル異議ノ完結及ヒ配當表ノ實施ニ
付テハ第六百四十條以下ノ規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ
別段ノ規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス

第七百十條 期日ニ出頭シタル債務者ハ各債權者ノ債權ニ對
シ又ハ其債權ノ爲メ主張スル順位ニ對シ異議ヲ申立ツルノ
權利アリ

出頭シタル各債權者ハ他ノ債權者ニ對シ前項ト同一ノ權利
アリ

執行スルヲ得ヘキ債權ニ對スル債務者ノ異議ニ付テハ第五
百五十五條第五百五十七條及ヒ第五百五十八條ノ規定ニ從フ

第七百十一條 競落人ハ賣却條件ニ因リ不動産ノ負擔ヲ引受
クルノ外配當表ノ實施ニ際シ買入代金ノ額ニ滿ツルヲ限ト
シ關係債權者ノ承諾ヲ得テ買入代金ノ支拂ニ換ヘ債務ヲ引
受クルコトヲ得若シ債權者競落人ナルキハ其債權ノ配當額カ
買入代金ノ額ニ滿ツル限りハ買入代金トシテ之ヲ計算スル
ニ因テ消滅ス然レモ引受ク可キ債權又ハ計算ス可キ競落人
ノ債權ニ對シ適當ナル異議アルキハ之ニ相當スル代金ヲ支
拂ヒ又ハ保證ヲ立ツ可シ

第七百十二條 配當表ヲ實施シタル後裁判所ハ配當調書及ヒ
競落決定ノ正本ヲ登記判事ニ送付シテ左ノ諸件ヲ囑託ス可
シ

第一 競落人ノ所有權ノ登記

第二 競落人ノ引受ケサル不動産上負擔記入ノ抹殺

第三 差押記入ノ抹殺

右登記及ヒ抹殺ニ關スル總テノ費用ハ競落人之ヲ負擔ス可シ

第七百十三條 數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ爲ス可キ不動産ノ競賣手續ニ付テハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百十四條 裁判所ハ競賣期日ノ公告前利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命スルヲ得但入札拂ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ナキモノハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百十五條 入札ハ入札期日ニ於テ執達吏ニ之ヲ差出ス可シ

入札ニハ左ノ諸件ヲ掲クルヲ要ス

第一 入札人ノ氏名及ヒ住所

第二 不動産ノ表示

第三 入札價額

第七百十六條 執達吏ハ入札人ノ面前ニ於テ入札ヲ開封シ之ヲ朗讀ス可シ

二人以上同價額ノ入札アルキハ執達吏抽籤ヲ以テ最高價入札人ヲ定ム

一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表セシテ他ノ入札價額ニ對スル比例ヲ以テ價額ヲ表シタル入札ハ之ヲ許サス

第七百十七條 最高價入札人タルノ呼上ヲ受ケタル者第六百七十六條ノ規定ニ從ヒ保證ヲ立ツ可キ求ヲ受クルモ之ヲ立テサルキハ其次位ノ入札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム但此場合ニ於テハ最初呼上ヲ受ケタル者ハ其入札價額ト次位ノ入札價額トノ差金ヲ負擔スルノ義務アリ

第三款 強制管理

第七百十八條 強制管理ニ付テハ第六百五十四條、第六百五十五條、第六百五十六條第一項、第四項及ヒ第六百六十三條乃至第六百六十六條ノ規定ヲ準用ス但登記判事ノ認證書ヲ提出スルヲ要セス不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務ヲ負フタル場合ニ於テハ第六百五十五條第一號、第二號ニ依リ提出ス可キ證書ハ不動産ヲ債務者カ占有スルヲ疏明スル證書ヲ以テ足ル

第七百十九條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於テ債務者カ管理人ノ事務ニ關涉スルヲ及ヒ不動産ノ收益ニ付キ處分スルヲ禁シ又不動産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルキハ其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キヲ命ス可シ既ニ收穫シ若クハ收穫ス可ク又ハ期限ノ到來シ若クハ到來

ス可キ果實ハ收益ニ屬ス
開始決定ハ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ因リ其効力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第七百二十條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制管理ノ申立アルモ更ニ開始決定ヲ爲スヲ得ス
右申立ハ執行記録ニ添附スルニ依リ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル強制管理ノ取消ト爲リタルキハ開始決定ヲ受ケタル効力ヲ生ス
假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セ

第七百二十一條 配當要求ハ執行力アル正本ニ因リ且假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第七百二十二條 執行裁判所ハ前二條ノ要求アリタルコトヲ債權者、債務者及ヒ管理人ニ通知ス可シ

第七百二十三條 管理人ハ裁判所之ヲ任命ス但債權者ハ適當ノ人ヲ推薦スルコトヲ得

管理人ハ管理及ヒ收益ノ爲メ自ラ不動産ヲ占有スルノ權ヲ有ス此場合ニ於テ抵抗ヲ受クルキハ執達吏ヲ立會ハシムルコトヲ得

管理人ノ任命ハ債務者ニ代リ第三者ノ給付ス可キ收益ヲ取立ツルノ權ヲ授與スルモノトス

第七百二十四條 裁判所ハ債權者及ヒ債務者ヲ審訊シタル後又適當トスル場合ニ於テハ鑑定人ヲ立會ハシメタル上管理人ニ管理ニ關シ必要ナル指揮ヲ爲シ又管理人ニ與フ可キ報酬ヲ定メ且管理人ノ業務施行ヲ監督ス可シ

裁判所ハ管理人ニ保證ヲ立テシメ又ハ二十圓以下ノ過料ヲ言渡シ又ハ其職ヲ免スルコトヲ得

第七百二十五條 第三者不動産ニ付キ強制管理ヲ許スコトヲ妨クルノ權利ヲ主張スルキハ第五百五十九條ノ規定ヲ準用ス

第七百二十六條 管理人ハ直チニ不動産ニ付キ得タル收益ヨリ其不動産ノ負擔ニ係ル租稅其他ノ公課ヲ扣除シタル後別段ノ手續ヲ要セスシテ管理ノ費用ヲ辨濟シ其殘額ノ配當ニ付キ債權者間ニ協議調ハサルキハ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

前項ノ届出アリタルキハ裁判所ハ第七百三條、第七百八條乃至第七百十條ノ規定ヲ準用シテ配當表ヲ作り其配當表ニ基キ管理人ヲシテ債權者ニ支拂ヲ爲サシム可シ

第七百二十七條 管理人ハ毎年及ヒ其業務施行ノ終了後各債

權者債務者及ヒ裁判所ニ計算書ヲ差出ス可シ
各債權者及ヒ債務者ハ計算書ノ送達アリタルヨリ七日ノ期
間内ニ執行裁判所ニ異議ノ申立ヲ爲ス可シ得
右期間内ニ異議ノ申立ナキハ計算ニ付キ全ク異議ナク且
管理人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス
異議ノ申立アルキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊シタル後之ヲ裁
判ス可シ若シ異議ノ申立ナク又ハ申立テタル異議ヲ完結シ
タルキハ裁判所ハ管理人ヲシテ卸任セシム可シ
第七百二十八條 管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス
此取消ハ各債權者不動産ノ收益ヲ以テ辨濟ヲ受ケタルキハ
職權ヲ以テ之ヲ爲ス
若シ管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルキ債權者カ必要ナ
ル金額ヲ豫納セサルニ於テハ裁判所ハ管理手續ノ取消ヲ命

スルコトヲ得

裁判所ハ右ノ取消ヲ決定スル際登記判事ニ強制管理ニ關ス
ル記入ノ抹殺ヲ囑託ス可シ

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第七百二十九條 商船其他ノ海船ニ對スル強制執行ハ不動産
ノ強制競賣ニ關スル規定ニ從ヒ之ヲ爲ス但事物ノ性質ニ因
テ差異ノ顯ハル、キ又ハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケ
タルキハ此限ニ在ラス

端舟其他櫓權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓權ヲ以テ運
轉スル舟ニハ本節ノ規定ヲ適用セス

第七百三十條 船舶ノ強制競賣ニ付テハ船舶カ差押ノ當時碇
泊スル港ノ區裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス

第七百三十一條 船舶ハ執行手續中差押ノ港ニ之ヲ碇泊セシ

ム可シ然レモ商業上利益ノ爲メ適當トスル場合ニ於テハ裁判所ハ總テノ利害關係人ノ申立ニ因リ其船舶ニ相當ノ保險ヲ付ス可キ條件ヲ以テ航行ヲ許スヲ得

第七百三十二條 強制競賣ニ付テノ申立ニハ左ノ證書ヲ添付ス可シ

第一 債務者カ所有者ナル場合ニ於テハ其所有者トシテ船舶ヲ占有スルヲ又船長ナル場合ニ於テハ船長トシテ船舶ヲ指揮スルヲ疏明スルニ足ル可キ證書

第二 船舶カ船舶登記簿ニ登記アル場合ニ於テハ其船舶ニ關スル有効ナル各登記事項ヲ包含シタル登記簿ノ抄本

債權者ハ公簿ヲ主管スル官署カ遠隔ノ地ニ在ルキハ第二號ノ抄本ノ求アラントテ執行裁判所ニ申立ツルヲ得

第七百三十三條 裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守保管及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲サシム可シ
此處分ヲ爲シタルキハ開始決定ノ送達前ト雖モ差押ノ効力ヲ生ス

若シ此處分ヲ續行スル爲メ債權者カ必要ナル金額ヲ豫納セサルキハ裁判所ハ之ヲ取消スヲ得

第七百三十四條 船長ニ對シ爲シタル判決ニ基キ船舶債權者ノ爲メ船舶ノ差押ヲ爲スキハ其差押ハ所有者ニ對シテモ効力アリ此場合ニ於テハ所有者モ亦利害關係人トス
差押後所有者若クハ船長ノ變更アルモ手續ノ續行ヲ妨ケス
差押後新ニ船長ト爲リタル者ハ之ヲ利害關係人トス此場合ニ於テハ前船長ハ其關係人タルノ責務ヲ免カル

第七百三十五條 船舶カ差押ノ當時其裁判所管轄内ニ存セサ

ルコノ顯ハル、キハ其手續ヲ取消ス可シ

第七百三十六條 競賣期日ノ公告ニハ第六百七十條第一號ニ揭ケタル旨趣ニ換ヘテ船舶ノ表示及ヒ其碇泊ノ場所ヲ掲ク可シ

第七百三十七條 定繫港ノ區裁判所管轄外ニ於テ差押ヲ爲シタルキハ執行裁判所ハ競賣期日ノ公告ヲ定繫港ノ區裁判所ニ送付シ其裁判所ノ揭示板ニ揭示ス可キコトヲ囑託ス可シ

第七百三十八條 船舶ノ股分ニ對スル強制執行ハ第六百三十五條ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス其執行ニ付テハ定繫港ノ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百三十九條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ債務者カ船舶ノ股分ニ付キ所有權ヲ有スルコトヲ證ス可キ船舶登記簿ノ抄本又ハ信用ス可キ證明書ヲ添付ス可シ

差押命令ハ債務者ノ外船舶管理人ニモ之ヲ送達ス可シ
差押ハ此命令ヲ船舶管理人ニ送達スルニ因リ債務者ニ送達スルト同一ノ効力ヲ生ス

第七百四十條 船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ付テハ第六百八十八條以下ノ規定ヲ準用ス

第七百四十一條 外國ノ船舶ヲ差押ヘタルキ又ハ登記簿ニ登記セサル船舶ヲ差押ヘタルキハ登記簿ニ記入ス可キ手續ニ關スル規定ヲ適用セス

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第七百四十二條 債務者カ特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ引渡ス可キキハ執達吏ハ之ヲ債務者ヨリ取上ケテ債權者ニ引渡ス可シ

第七百四十三條 債務者カ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ又ハ明渡ス可キキハ執達吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ其占有ヲ得セシム可シ
此強制執行ハ債權者又ハ其代理人カ受取ノ爲メ出頭シタルキニ限り之ヲ爲スヲ得
強制執行ノ目的物ニ非サル動産ハ執達吏之ヲ取除キテ債務者ニ引渡ス可シ若シ債務者不在ナルキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル家族若クハ雇人ニ之ヲ引渡ス可シ
債務者及ヒ前項ニ掲ケタル者不在ナルキハ執達吏ハ右ノ動産ヲ債務者ノ費用ニテ保管ニ付ス可シ
債務者カ其動産ノ受取ヲ怠ルキハ執達吏ハ執行裁判所ノ許可ヲ得テ差押物ノ競賣ニ關スル規定ニ從ヒ之ヲ賣却シ其費用ヲ扣除シタル後其代金ヲ供託ス可シ

第七百四十四條 引渡ス可キ物品第三者ノ手中ニ存スルキハ債務者ノ物品引渡ノ請求ハ申立ニ因リ金錢債權ノ差押ニ關スル規定ニ從ヒ之ヲ債權者ニ轉付ス可シ
第七百四十五條 債務者カ爲ス可キ行爲ヲ爲サ、ル場合ニ於テ第三者之ヲ爲シ得ヘキモノナルキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法財産編第三百八十三條第三項、第四項ノ規定ニ從ヒ決定ヲ爲ス
債權者ハ同時ニ其行爲ヲ爲スニ因リ生ス可キ費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲サシムル言渡アラント申立ツルヲ得但
其行爲ヲ爲スニ因リ此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルキ後日其請求ヲ爲スノ權利ヲ妨ケス
第七百四十六條 債務者カ其意思ノミニ因リ爲シ得ヘキ行爲ニシテ第三者之ヲ爲シ得ヘカラサルモノナルキハ第一審ノ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ民法財産編第三百八十六條第三項ノ規定ニ從ヒ決定ヲ爲ス

第七百四十七條 前二條ノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得但決定前債務者ヲ審訊ス可シ

第七百四十八條 債務者カ權利關係ノ成立ヲ認諾ス可キト又ハ其他ノ意思ノ陳述ヲ爲ス可キトノ判決ヲ受ケタルキハ其判決ノ確定ヲ以テ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタルモノト看做ス反對給付ノアリタル後認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ第五百二十八條及ヒ第五百三十條ノ規定ニ從ヒ確定判決ノ執行力アル正本ヲ付與シタルキ其効力ヲ生ス

第四章 假差押及ヒ假處分

第七百四十九條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢ノ債權ニ換フルヲ得ヘキ請求ニ付キ動産又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ

保全スル爲メ之ヲ爲スヲ得
假差押ハ未タ期限ニ至ラサル請求ニ付テモ亦之ヲ爲スヲ得

第七百五十條 假差押ハ之ヲ爲サ、レハ判決ノ執行ヲ爲スヲ能ハス又ハ之ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スルノ恐アルキ殊ニ外國ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ル可キキハ之ヲ爲スヲ得

第七百五十一條 假差押ノ命令ハ假ニ差押フ可キ物品ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所又ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス

第七百五十二條 假差押ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 保全ス可キ請求ノ表示及ヒ其請求カ一定ノ金額ニ係ラサルキハ其價額

第二 假差押ノ理由タル事實

請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ
申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第七百五十三條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經
スシテ之ヲ爲スヲ得

請求又ハ假差押ノ理由ヲ疏明セサルキト雖モ假差押ニ因リ
債務者ニ生ス可キ損害ノ爲メ債權者カ裁判所ノ意見ヲ以テ
定ムル保證ヲ立テタルキハ裁判所ハ假差押ヲ命スルヲ得
又請求及ヒ假差押ノ理由ヲ疏明シタルキト雖モ裁判所ハ保
證ヲ立テシメ假差押ヲ命スルヲ得

保證ヲ立テタルキハ其保證ヲ立テタルト及ヒ如何ナル方法
ヲ以テ之ヲ立テタルトナ假差押ノ命令ニ記載ス可シ

第七百五十四條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ爲
ス場合ニ於テハ終局判決ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テ

ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

假差押ノ申請ヲ却下シ又ハ保證ヲ立テシムル裁判ハ債務者
ニ之ヲ通知スルヲ要セス

第七百五十五條 假差押ノ命令ニハ假差押ノ執行ヲ停止スル
ヲ得ル爲メ又ハ執行シタル假差押ヲ取消スヲ得ル爲メニ債
務者ヨリ供託ス可キ金額ヲ記載ス可シ

債務者ハ假差押決定ニ對シ異議ヲ申立ツルヲ得

此異議ニ付テハ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立ツルノ理由ヲ
開示ス可シ

異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セス

第七百五十六條 異議ノ申立アリタルキハ裁判所ハ口頭辯論
ノ爲メ當事者ヲ呼出ス可シ
裁判所ハ終局判決ヲ以テ假差押ノ全部若クハ一分ノ認可、變

更又ハ取消ヲ言渡シ又意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ツ可キ
ノ條件ヲ付シテ之ヲ言渡スヲ得

第七百五十七條 本案ノ未タ繫屬セサルキハ假差押裁判所ハ

債務者ノ申立ニ因リ口頭辯論ヲ經スシテ相當ニ定ムル期間

内ニ訴ヲ起ス可キヲ債權者ニ命ス可シ

此期間ヲ徒過シタル後ハ債務者ノ申立ニ因リ終局判決ヲ以
テ假差押ヲ取消ス可シ

第七百五十八條 債務者ハ假差押ノ理由消滅シ其他情況ノ變

更シタルキ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ム可キ保證ヲ立テン

トノ提供ヲ爲シタルキハ假差押ノ認可後ト雖モ假差押ノ取

消ヲ申立ツルヲ得

此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス其裁判ハ假差押
ヲ命シタル裁判所又本案カ既ニ繫屬シタルキハ本案ノ裁判

所之ヲ爲ス

第七百五十九條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執行ニ關スル規

定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルキハ此限ニ在ラ
ス

第七百六十條 假差押ノ執行ハ假差押命令ノ正本ニ基キ之ヲ

爲ス但其命令ニハ假差押ノ命令ヲ發シタル後債權者又ハ債
務者ノ變更シタルキニ限リ執行文ヲ附記スルヲ要ス

假差押命令ノ執行ハ命令ヲ言渡シ又ハ申立人ニ命令ヲ送達
シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過スルキハ之ヲ爲スヲ許サ

ス

右執行ハ債務者ニ差押命令ヲ送達スル前ト雖モ之ヲ爲スヲ
得

第七百六十一條 動産ニ對スル假差押ノ執行ハ各差押ト同一

ノ原則ニ從ヒ之ヲ爲ス
債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判所ヲ以テ管轄
執行裁判所トス
債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲
スコトヲ禁スル命令ノミヲ爲ス可シ
差押ヘタル金錢及ヒ配當手續ニ因リ得タル金錢ハ之ヲ供託
ス可シ其他ノ差押物ノ競賣及ヒ差押有價證券ノ換價ハ一時
之ヲ爲サス然レモ差押物ニ著シキ價額ノ減少ヲ生スルノ恐
アルキ又ハ其貯藏ニ付キ不相應ナル費用ヲ生ス可キハ執
行裁判所ハ申立ニ因リ其物品ヲ競賣シ賣得金ヲ供託ス可キ
旨ヲ執達吏ニ命スルコトヲ得
第七百六十二條 不動産ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ命
令ヲ登記簿ニ記入スルニ因リ之ヲ爲ス

第七百六十三條 假差押執行ノ爲メ強制管理ヲ爲ス場合ニ於
テハ保全ス可キ債權ニ相當スル金額ヲ取立テ之ヲ供託ス可
シ
第七百六十四條 船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ假差押ノ當時
碇泊スル港ニ碇泊セシムルニ因リ之ヲ爲ス裁判所ハ債權者
ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及ヒ保管ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲
ス
第七百六十五條 假差押命令ニ於テ定メタル金額ヲ供託シタ
ルキハ執行裁判所ハ執行シタル假差押ヲ取消ス可シ
假差押ノ續行ニ付キ特別ノ費用ヲ要シ且之カ爲メ必要ナル
金額ヲ債權者カ立替ヘサルキモ亦執行裁判所ハ假差押ノ取
消ヲ命スルコトヲ得
右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第七百六十六條 係争物ニ關スル假處分ハ現状ノ變更ニ因リ當事者一方ノ權利ノ實行ヲ爲スヲ能ハス又ハ之ヲ爲スニ著シキ困難ヲ生スルノ恐アルキ之ヲ許ス

第七百六十七條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及ヒ手續ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルキハ此限ニ在ラス

第七百六十八條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス
右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得

第七百六十九條 裁判所ハ其意見ヲ以テ目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ定ム

假處分ハ第三者ヲシテ係争物ノ管守ヲ爲サシメ又ハ相手方ニ行爲ヲ命シ若クハ之ヲ禁シ又ハ給付ヲ命スルヲ以テ之ヲ爲スヲ得

假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スヲ禁シタルキハ裁判所ハ第七百六十二條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁止ヲ記入セシム可シ

第七百七十條 特別ノ情况アルキニ限り保證ヲ立テシメテ假處分ノ取消ヲ許スヲ得

第七百七十一條 假處分ハ争アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲メニモ亦之ヲ爲スヲ得但其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由ニ因リ之ヲ必要トスルキニ限ル

第七百七十二條 急迫ナル場合ニ於テハ係争物ノ所在地ヲ管

轄スル區裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ得

此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ取消ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲コトヲ得

第七百七十三條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判所トス但本案カ控訴審ニ繫屬スルキニ限り控訴裁判所トス

第七百七十四條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第七編 公示催告手續

第七百七十五條 請求又ハ權利ノ届出ヲ爲サシムル爲メノ裁判上ノ公示催告ハ其届出ヲ爲サ、ルキハ失權ヲ生スルノ効力ヲ以テ法律ニ定メタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百七十六條 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此申立ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得申立ヲ許ス可キハ裁判所ハ公示催告ヲ爲ス可ク其公示催告ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 申立人ノ表示

第二 請求又ハ權利ヲ公示催告期日マテニ届出ツ可キノ催告

第三 届出ヲ爲サ、ルニ因リ生ス可キ失權ノ表示

第四 公示催告期日ノ指定

第七百七十七條 公示催告ニ付テノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ及ヒ官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲シ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルキハ第一百五十八條ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

第七百七十八條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルキハ少ナクモ二个月ノ時間ヲ存スルヲ要ス

第七百七十九條 公示催告期日ノ終結後ト雖モ除權判決前ニ届出ヲ爲スキハ適當ナル時間ニ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七百八十條 除權判決ハ申立ニ因リ之ヲ爲ス

右判決前ニ詳細ナル探知ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルヲ得

除權判決ノ申立ヲ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制限又ハ留保ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第七百八十一條 申立人ノ申立ノ理由トシテ主張シタル權利ヲ爭フコトノ届出アリタルキハ其情況ニ從ヒ届出テタル權利ニ付テノ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保ス可シ

第七百八十二條 申立人カ公示催告期日ニ出頭セサルキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ此申立ハ公示催告期日ヨリ六个月ノ期間内ニ限り之ヲ爲スヲ許ス

第七百八十三條 公示催告手續ヲ完結スル爲メ新期日ヲ定メタルキハ其期日ノ公告ヲ爲スヲ要セス

第七百八十四條 裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲ爲スヲ得

第七百八十五條 除權判決ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
除權判決ニ對シテハ左ノ場合ニ於テ申立人ニ對スル訴ヲ以
テ催告裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ニ不服ヲ申立
ツルコトヲ得

- 第一 法律ニ於テ公示催告手續ヲ許ス場合ニ非サルキ
- 第二 公示催告ニ付テノ公告ヲ爲サス又ハ法律ニ定メタル方法ヲ以テ公告ヲ爲サ、ルキ
- 第三 公示催告ノ期間ヲ遵守セサルキ
- 第四 判決ヲ爲ス判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタルキ
- 第五 請求又ハ權利ノ届出アリタルニ拘ハラズ判決ニ於テ其届出ヲ法律ニ從ヒ顧ミサルキ
- 第六 罰ス可キ行爲ノ爲メ原狀回復ノ訴ヲ爲スコトヲ得ル

條件ノ存スルキ

第七百八十六條 不服申立ノ訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レモ前條第四號及ヒ第六號ニ掲ケタル不服申立ノ理由ノ一ニ基キ訴ヲ起シ且原告カ右ノ日ニ其理由ヲ知ラサリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由ノ原告ニ知レタル日ヲ以テ始マル
除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ十年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコトヲ得ス

第七百八十七條 裁判所ハ第二百一十一條ノ條件ノ存セサルキト雖モ數箇ノ公示催告ノ併合ヲ命スルコトヲ得
第七百八十八條 盜取セラレ又ハ紛失若クハ滅失シタル爲替證券其他商法ニ無効ト爲シ得ヘキコトヲ定メタル證書ノ無効

宣言ノ爲メニ爲ス公示催告手續ニ付テハ以下數條ノ特別規定ヲ適用ス

此規定ハ法律上公示催告手續ヲ許ス他ノ證書ニ付キ其法律中ニ特別規定ヲ設ケサル限りハ之ヲ適用ス

第七百八十九條 無記名證券又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘク且略式裏書ヲ付シタル證書ニ付テハ最終ノ所持人公示催告手續ヲ申立ツルノ權アリ

其他ノ證書ニ付テハ證書ニ因リ權利ヲ主張シ得ヘキ者此申立ヲ爲スノ權アリ

第七百九十條 公示催告手續ハ證書ニ表示シタル履行地ノ裁判所之ヲ管轄ス若シ證書ニ其履行地ヲ表示セサルキハ發行人カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄シ其裁判所ヲキキハ發行人カ發行ノ當時普通裁判籍ヲ有セシ地ノ裁判所

之ヲ管轄ス

證書ヲ發行スルノ原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルキハ其物品所在地ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第七百九十一條 申立人ハ申立ノ憑據トシテ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一 證書ノ謄本ヲ差出シ又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書ヲ十分ニ認知スルニ必要ナル諸件ヲ開示スルコト

第二 證書ノ盜難紛失滅失及ヒ公示催告手續ヲ申立ツルヲ得ルノ理由タル事實ヲ説明スルコト

第七百九十二條 公示催告中ニ公示催告期日マテニ權利ヲ裁判所ニ届出テ且其證書ヲ提出ス可キ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告ス可ク又失權トシテ證書ノ無効宣言ヲ爲ス可キ旨ヲ戒示ス可シ

第七百九十三條 公示催告ノ公告ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シ及ヒ新聞紙ニ三回掲載シテ之ヲ爲ス
公示催告裁判所ノ所在地ニ取引所アルキハ取引所ニモ亦此公告ヲ揭示ス可シ

第七百九十四條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ少ナクモ六個月ノ時間ヲ存スルヲ要ス

第七百九十五條 除權判決ニ於テハ證書ヲ無効ナリト宣言ス可シ
除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ
不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効宣言ヲ取消シタルキハ其判決ノ確定後官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可シ

第七百九十六條 除權判決アリタルキハ其申立人ハ證書ニ因リ義務ヲ負擔スル者ニ對シ證書ニ因レル權利ヲ主張スルヲ得

第八編 仲裁手續

第七百九十七條 一名又ハ數名ノ仲裁人ヲシテ争ノ判断ヲ爲サシムルノ合意ハ當事者カ係争物ニ付キ和解ヲ爲スノ權利アル場合ニ限り其効力ヲ有ス

第七百九十八條 將來ノ争ニ關スル仲裁契約ハ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル争ニ關セサルキハ其効力ヲ有セス

第七百九十九條 仲裁契約ニ仲裁人ノ選定ニ關スル定ナキキハ當事者ハ各一名ノ仲裁人ヲ選定ス

第八百條 當事者ノ雙方カ仲裁人ヲ選定スル權利ヲ有スルキハ先ニ手續ヲ爲ス一方ハ書面ヲ以テ相手方ニ其選定シタル仲裁人ヲ指示シ且七日ノ期間内ニ同一ノ手續ヲ爲ス可キ旨ヲ催告ス可シ

右期間ヲ徒過シタルキハ管轄裁判所ハ先ニ手續ヲ爲ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス

第八百一條 當事者ノ一方ハ相手方ニ仲裁人選定ノ通知ヲ爲シタル後ハ相手方ニ對シテ其選定ニ羈束セラル

第八百二條 仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受若クハ施行ヲ拒ミタルキハ其仲裁人ヲ選定シタル當事者ハ相手方ノ催告ニ因リ七日ノ期間内ニ他ノ仲裁人ヲ選定ス可シ此期間ヲ徒過シタルキハ管轄裁判所ハ先ニ手續ヲ爲ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス可シ

第八百三條 當事者ハ判事ヲ忌避スルノ權利アルト同一ノ理由及ヒ條件ヲ以テ仲裁人ヲ忌避スルヲ得
其他仲裁契約ヲ以テ選定シタルニ非サル仲裁人カ其責務ノ

履行ヲ不當ニ遲延スルキハ亦之ヲ忌避スルヲ得
無能力者、聾者、啞者及ヒ公權ノ剝奪又ハ停止中ノ者ハ之ヲ忌避スルヲ得

第八百四條 仲裁契約ハ當事者ノ合意ヲ以テ左ノ場合ノ爲メ豫定ヲ爲サ、リシキハ其効力ヲ失フ

第一 契約ニ於テ一定ノ人ヲ仲裁人ニ選定シ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受ヲ拒ミ又ハ仲裁人ノ取結ヒタル契約ヲ解キ又ハ其責務ノ履行ヲ不當ニ遲延シタルキ

第二 仲裁人カ其意見ノ可否同數ナル旨ヲ當事者ニ通知シタルキ

第八百五條 仲裁人ハ仲裁判斷前ニ當事者ヲ審訊シ且必要トスル限りハ争ノ原因タル事件關係ヲ探知ス可シ

仲裁手續ニ付キ當事者ノ合意アラサル場合ニ於テハ其手續ハ仲裁人ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

第八百六條 仲裁人ハ其面前ニ任意ニ出頭スル證人及ヒ鑑定人ヲ訊問スルヲ得

仲裁人ハ證人又ハ鑑定人ヲシテ宣誓ヲ爲サシムルノ權ナシ
第八百七條 仲裁人ノ必要ト認ムル判斷上ノ行爲ニシテ仲裁人ノ爲スヲ得サルモノハ當事者ノ申立ニ因リ管轄裁判所之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ相當ト認メタルキニ限ル
證人又ハ鑑定人ニ供述ヲ命シタル裁判所ハ證據ヲ述フル
又ハ鑑定ヲ爲スヲ拒ミタル場合ニ於テ必要ナル裁判ヲモ亦爲スノ權アリ

第八百八條 仲裁人ハ當事者カ仲裁手續ヲ許ス可カラサルヲ主張スルキ殊ニ法律上有効ナル仲裁契約ノ成立セサルヲ

仲裁契約カ判斷ス可キ争ニ關係セサルヲ又ハ仲裁人カ其職務ヲ施行スル權ナキヲ主張スルキト雖モ仲裁手續ヲ續行シ且仲裁判斷ヲ爲スヲ得

第八百九條 數名ノ仲裁人カ仲裁判斷ヲ爲ス可キハ過半數ヲ以テ其判斷ヲ爲ス可シ但仲裁契約ニ別段ノ定アルキハ此限ニ在ラス

第八百十條 仲裁判斷ニハ其作リタル日ヲ記載シテ仲裁人之ニ署名捺印ス可シ

仲裁人ノ署名捺印シタル判斷ノ正本ハ之ヲ當事者ニ送達シ其原本ハ送達ノ證書ヲ添ヘテ管轄裁判所ノ書記課ニ之ヲ預ケ置ク可シ

第八百十一條 仲裁判斷ハ當事者間ニ於テ確定シタル裁判所ノ判決ト同一ノ効力ヲ有ス

第八百十二條 仲裁判斷ノ取消ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ申立ツルヲ得

第一 仲裁手續ヲ許ス可カラザリシキ

第二 仲裁判斷カ禁止ノ行爲ヲ爲ス可キ旨ヲ當事者ニ言渡シタルキ

第三 當事者カ仲裁手續ニ於テ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシキ

第四 仲裁手續ニ於テ當事者ヲ審訊セザリシキ

第五 仲裁判斷ニ理由ヲ付セザリシキ

第六 第四百七十八條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルキ

仲裁判斷ノ取消ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲シタルキハ本條第四號及ヒ第五號ニ掲ケタル理由ニ因リ之ヲ爲スヲ得ス

第八百十三條 仲裁判斷ニ因リ爲ス強制執行ハ執行判決ヲ以テ其許ス可キヲ言渡シタルキニ限り之ヲ爲スヲ得

右執行判決ハ仲裁判斷ノ取消ヲ申立ツルヲ得ヘキ理由ノ存スルキハ之ヲ爲スヲ得ス

第八百十四條 執行判決ヲ爲シタル後ハ仲裁判斷ノ取消ハ第八百十二條第六號ニ掲ケタル理由ニ因テノミ之ヲ申立ツルヲ得但當事者カ自己ノ過失ニ非スシテ前手續ニ於テ取消ノ理由ヲ主張スル能ハザリシヲ疏明シタルキニ限ル

第八百十五條 仲裁判斷取消ノ訴ハ前條ノ場合ニ於テハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ
右期間ハ當事者カ取消ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レモ執行判決ノ確定前ニハ始マラサルモノトス但判決ノ確定ト爲リタル日ヨリ起算シテ十年ノ滿了後ハ此訴ヲ起ス

ヲ許サス

仲裁判斷ヲ取消スルハ執行判決ノ取消ヲモ亦言渡ス可シ

第八百十六條

仲裁人ヲ選定シ若クハ忌避スルヲ仲裁契約ノ

消滅スルヲ仲裁手續ヲ許ス可カラサルヲ仲裁判斷ヲ取消ス

ヲ又ハ執行判決ヲ爲スヲ目的トスルノ訴ニ付テハ仲裁契

約ニ指定シタル區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ其指定

ナキハ請求ヲ裁判上主張スル場合ニ於テ管轄ヲ有ス可キ

區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス

前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所數箇アルハ當事者又ハ仲

裁人カ最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス

第八百十七條

遺言上ノ處分其他合意ニ基カサル處分ニ因リ

法律ノ許ス方法ヲ以テ設ケタル仲裁判斷所ニハ本編ノ規定

ヲ準用ス

